

しなればならないので、其遲過ぎるのが大分苦になつた。男は香の高い葉巻を銜へて、行く／＼夜の中へ微かな色を立てる煙を吐いた。それが風の具合で後から従ふ敬太郎の鼻を時々快く侵した。彼は其香ひを嗅ぎ／＼鈍い足並を我慢して實直に其跡を踏んだ。男は脊が高いので後から見ると、一寸西洋人の様に思はれた。夫には彼の吹かしてゐた強い葉巻が多少錯覺を助けた。すると聯想が忽ち伴侶の方に移つて、女が旦那から買つて貰つた革の手袋を穿めてゐる洋妾の様に思はれた。敬太郎が不圖斯ういふ空想を起して、可笑しいと思ひながらも、なほ一人で興を催してゐると、二人は最前待ち合はした停留所の前まで来て一寸立ち留まつたが、やがてまた線路を横切つて向側へ越した。敬太郎も二人のする通りを真似た。すると二人はまた美士代町の角を此方から反対の側へ渡つた。敬太郎もつゝいて同じ側へ渡つた。二人はまた歩き出して南へ動いた。角から半町許來ると、其處にも赤く塗つた鐵の柱が一本立つてゐた。二人は其柱の傍へ寄つて立つた。彼等は又三田線

を利用して南へ、歸るか、行くか、する人だと此時始めて氣が付いた敬太郎は、自分も是非同じ電車へ乗らなければならぬといふ覺悟した。彼等は申し合せた様に敬太郎の方を顧みた。固より彼のゐる方から電車が横町を曲つて來るからではあるが、夫にしても敬太郎は餘り好い心持はしなかつた。彼は帽子の鍔を引つ繰り返して、ぐつと下へ卸して見たり、手で顔を撫で、見たり、成るべく軒下へ身を寄せて見たり、わざと變な見當を眺めて見たりして、電車の現はれるのを待つらく待ち侘びた。

間もなく一臺來た。敬太郎はわざと二人の乗つた後から這入つて、嫌疑を避けようと工夫した。夫でしばらく後の方に愚圖々々してゐると、女は例の長いコート裾を踏まへない許に引き摺つて、車掌臺の上に足を移した。然しあとから直續くと思つた男は、案外上る氣色もなく、足を揃へた儘、兩手を外套の隠袋に突き差して立つてゐた。敬太郎は女を見送りに男がわざ／＼此處迄足を運んだのだといふ事に漸く氣が付いた。實をいふと、彼は男より

も女の方には餘計興味を持つてゐたのである。男と女が此處で分れるとすれば、無論男を捨て、女の先途丈を見届けたかつた。けれども自分が田口から依託されたのは女と關係のない黒い中折帽を被つた男の行動丈なので、彼は我慢して車臺に飛び上がるのを差し控へた。

(三十六)

女は車臺に乗つた時、一寸男に目禮したが、夫限中へ這入つて仕舞つた。冬の夜の事だから、窓硝子は悉く締切つてあつた。女はことさらにそれを開けて内から首を出す程の愛嬌も見せなかつた。夫でも男はのつそり立つて、車の動くのを待つてゐた。車は動き出した。二人の間に挨拶の交換がもう必要でないと思つた如く、電力は急いで光る窓を南の方へ運び去つた。男は此時口に銜へた葉巻を土の上に投げた。夫から足の向を變へて又三つ角の交又

點迄出ると、今度は左へ折れて唐物屋の前で留まつた。其處は敬太郎が人に突き當られて、竹の洋杖を取り落した記憶の新しい停留所であつた。彼は男の後を見え隠れに此處迄跟いて来て、又見たくもない唐物屋の店先に飾つてある新柄の襟飾だの、絹帽だの、變り縞の膝掛だのを覗き込みながら、斯う遠慮をする様では、探偵の興も覺る丈だと考へた。女が既に離れた以上、自分の仕事に飽きが來たと云つては濟まないが、前同様であるべき窮屈の程度が急に著るしく感ぜられてならなかつた。彼の依頼されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られてゐるのだから、もう是で偵察の役目は濟んだものとして、下宿へ歸つて寝ようかと思つた。其處へ男の待つてゐる電車が來たと見えて、彼は長い手で鐵の棒を握るや否や瘖せた身體を體よく留まり切らない車臺の上に乗せた。今迄躊躇してゐた敬太郎は急に此瞬間を失つてはといふ氣が出たので、すぐ同じ車臺に飛上つた。車内は夫程込みあつて居なかつたので、乗客は自由に互の顔を見合ふ

餘裕を充分持つてゐた。敬太郎は箱の中に身體を入れると同時に、既に席を占めた五六人から一度に視線を集められた。其中には今坐つた許の中折の男の交つてゐたが、彼の敬太郎を見た眼のうちには、おやといふ認識はあつたが、付け胡はれてゐるなといふ疑惑は更に現れてゐなかつた。敬太郎は漸く伸びくした心持になつて、男と同じ側を擇つて腰を掛けた。此電車で何處へ連れて行かれる事かと思つて軒先を見ると、江戸川行と黒く書いてあつた。彼は男が乗り換へさへすれば、自分も早速降りる積で、停留所へ来る毎に男の様子を窺つた。男は始終隠袋へ手を突き込んだ儘、多くは自分の正面かわが膝の上かを見てゐた。其様子を形容すると、何んにも考へずに何か考へ込んでゐると云ふ風であつた。所が九段下へ掛つた頃から、長い首を時々伸ばして、或物を確かめたい様に、窓の外を覗き出した。敬太郎もつい釣り込まれて、見悪い外を透す様に眺めた。やがて電車の走る響の中に、窓硝におたつて捲ける雨の音が、ぼつりくと耳元でし始めた。彼は携へてゐる竹筒の

洋杖を眺めて、この代りに雨傘を持つて来れば可かつたと思ひ出した。

彼は洋食店以後、中折を被つた男の人柄と、世の中に丸で疑ひを掛てゐない其眼付とを注意した結果、此時不圖、こんな窮屈な思ひをして、入らざる材料を集るよりも、いつそ露骨に此方から話し掛けて、當人の許諾を得た事實丈を田口に報告した方が、今更遅蒔の様でも、まだ氣が利いてゐやしないかと考へて、自分で自分を彼に紹介する便法を工夫し始めた。其内電車はとうとう終點迄来た。雨は益々烈しくなつたと見えて、車が留まるとざあといふ音が急に彼の耳を襲つた。中折の男は困つたなと云ひながら、外套の襟を立て、洋袴の裾を返した。敬太郎は洋杖を突きながら立ち上つた。男は雨の中へ出ると、直寄つて来る俥引を捕まへた。敬太郎も後れない様に一臺雇つた。車夫は棍棒を上げながら、何處へと聞いた。敬太郎はあの車の後に付いて行けと命じた。車夫はへいと云つて無暗に駆け出した。一筋道を矢來の交番の下迄来ると、車夫は又棍棒を留めて、旦那何方へ行くんですと聞いた。

男の乗った車は幾何幌の内から延び上つても影さへ見えなかつた。敬太郎は車上に洋杖を突つ張た儘、雨の音のする中で方角に迷つた。

報告

(一)

眼が覺めると、自分の住み慣れた六疊に、何時もの通り寝てゐる自分が、敬太郎には全く變に思はれた。昨日の出来事は凡て本當の様でもあつた。又纏まりのない夢の様でもあつた。もつと綿密に形容すれば、『本當の夢』の様でもあつた。酔つた氣分で町の中に活動したといふ記憶も伴つてゐた。夫よりか、酔つた氣分が世の中に充ちてゐたといふ感じが一番強かつた。停留所も電車も酔つた氣分に充ちてゐた。寶石商も、草屋も、赤と青の旗振りも、同じ空氣に酔つてゐた。薄青いペンキ塗の洋食店の二階も、其處に席を占めた眉の間に黒子のある紳士も、色の白い女も、悉く此空氣に包まれてゐた。二人の話しに出て来る、何處にあるか分らない所の名も、男が女に遣る

約束をした珊瑚の珠も、みんな陶然とした一種の気分を帯びてゐた。最も此気分にあちて活躍したものは竹の洋杖であつた。彼が其洋杖を突いたまゝ、幌を打つ雨の下で、方角に迷つた時の心持は、此気分の高潮に達した幕前の一區切として、殆んど狐から取り憑かれた人の感じを彼に與へた。彼は其時店の灯で侘びしく照らされたびしょ濡れの往來と、坂の上に小さく見える交番と、其左手にぼんやり黒くうつる木立とを見廻して、果して是が今日の仕事の結果かと疑つた。彼は已を得ず車夫に棍棒を向け直させて、思ひも寄らない本郷へ行けと命じた事を記憶してゐた。

彼は寝ながら天井を眺めて、自分に最も新しい昨日の世界を幾順となく眼の前に循環させた。彼は二日酔の眼と頭をもつて、蠶の絲を吐く様に夫から夫へと出てくる此記念の畫を飽かず見詰めてゐたが、仕舞には眼先に漂よふふわ／＼した夢の蒼蠅さに堪へなくなつた。夫でも後から後からと向ふで獨り勝手に現はれて來るので、彼は正氣でありながら、何かに魅入られたの

ではなからうかと云ふ疑さへ起した。彼は此淺い疑に關聯して、例の洋杖を胸に思ひ浮べざるを得なかつた。昨日の男も女も彼の眼には繪を見る程明かであつた。容貌は固より服装から歩き付に至る迄悉く記憶の鏡に判切りと映つた。夫でゐて二人とも遠くの國にゐる様な心持がした。遠くの國にゐながら、つい近くにあるものを見るやうに、鮮やかな色と形を備へて眸を侵して來た。此不思議な影響が洋杖から出たかも知れないといふ神經を敬太郎は何處かに持つてゐた。彼は昨夕法外な車賃を食られて、宿の門口を潛つた時、何心なく其洋杖を持つた儘自分の室迄歸つて來て、是は人の目に觸れる所に置くべきものでないといふ顔をして、寐る前に、戸棚の奥の行李の後へ投げ込んで仕舞つたのである。

今朝は蛇の頭に夫程の意味がないやうにも思はれた。ことに是から田口に逢つて、探偵の結果を報告しなければならぬと云ふ實際問題の方が頭に浮いて來ると、猶更さういふ感じが深くなつた。彼は一日の午後から宵へ掛け

て、妙に一種の空気に酔はされた気分であつた。活動の結果を、普通の人間が處世上に利用出来る様に、筋の立つた報告に纏める段になると、自分の引き受けた仕事は成功してゐるのか失敗してゐるのか殆んど分らなかつた。従つて洋杖の御蔭を蒙つてゐるのか、ゐないのかも判然しなかつた。床の中で前後を繰り返した敬太郎には、正しく其御蔭を蒙つてゐるらしくも見えなかつた。又決して其御蔭を蒙つてゐない様にも思はれた。彼は兎も角も二日酔の魔を拂ひ落してからの事だと決心して、急に衣を着を斜ぐつて跳起きた。夫から洗面所へ下りて氷を程冷めたい水で頭をさあぐ洗つた。是で昨日の夢を髪の毛の根本から振ひ落して、普通の人間に立ち還つた様な氣になれたので、彼は景氣よく三階の室に上つた。其處の窓を深きよく明け放した彼は、東向に直立して、上野の森の上から高く射す太陽の光を全身に浴びながら、十遍許り深呼吸をした。斯う精神作用を人間並に刺激した後で、彼は一服しながら、田口へ報告すべき事柄の順序や條項に就て力

めて實際的に思慮を回らした。

(二)

突き留めて見ると、田口の役に立ちさうな種は丸で上つてゐない様にも思はれるので、敬太郎は少し心細くなつて来た。けれども先方では今朝にも彼の報告を待ち受けてゐるやうに氣が急ぐので、彼は早速田口家へ電話を掛けた。是から直行つて可いかと聞くと、大分待たした後で、差支ないといふ答が、例の書生の口を通して来たので、彼は豫猶なく内幸町へ出掛けた。田口の門前には車が二臺待つてゐた。玄關にも靴と下駄が一足宛あつた。彼は此間と違つて日本間の方へ案内された。其處は十疊程の廣い座敷で、長い床に大きな懸物が二幅掛かつてゐた。湯呑の様な深い茶碗に、書生が番茶を一抔汲んで出した。桐を削つた手焙も同じ書生の手で運ばれた。柔かい座

蒲團も同じ男が勧めて呉れた丈で、女は一切出て来なかつた。敬太郎は廣い室の真中に畏まつて、主人の足音の近づくのを窮屈に待つた。所が其主人は用談が果てないと見えて、何時迄待つても中々現れなかつた。敬太郎は已むを得ず茶色になつた古さうな懸物の價額を想像したり、手焙の縁を撫で廻したり、或は袴の膝へさちりと兩手を乗せて一人改まつて見たりした。凡て自分の周囲があまり綺麗に調つてゐる丈に、居心地が新し過ぎて彼は容易に落付けなかつたのである。仕舞に遠棚の上にある畫帖らしい物を取り卸して覽ようかと思つたが、其立派な表紙が、是は裝飾だから手を觸れちゃ不可ないと斷る様に光るので、彼はつひに手を出し兼ねた。

斯う敬太郎の神経を悩ました主人は、彼を稍小一時間も待たした後で、漸く應接間から出て来た。

『何うも長い間御待たせ申して。——客が中々歸らないものだから』
 敬太郎は此言譯に對して適當と思ふ様な挨拶を一口と、それに添へた叮嚀

な御辭儀一つした。夫からすぐ昨日の事を云ひ出さうとしたが、何を何う先に述べたら都合が可いか、此場に臨んで急に又迷ひ始めたうちに、切り出す機を逸してしまつた。主人は又冒頭から左も忙しさに聲も身體も取り扱つてゐる癖に、何處か腹の中に餘裕の貯蔵庫でもある様に、決して周章して、探偵の結果を聞きながらなかつた。本郷では氷が張るかとか、三階では風が強くなるだらうとか、下宿にも電話があるのかとか、調子は至極面白さうだけれども、其實詰まらない事許話の種にした。敬太郎は向ふの間に從つて主人の満足する程度にわが答へを運んでゐたが、相手は斯んな無意味な話を進めて行くうちに、暗に彼の様子を注意してゐるらしかつた。其處迄は彼もぼんやり氣が付いた。然し主人が何故そんな注意を自分に拂ふのか、其譯は丸で解らなかつた。すると、

『何うです。昨日は、旨く行きましたか』と主人が突然聞き出した。斯う聞かれるだらう位の腹は始めから敬太郎にも有つたのだが、正直に答へれば、

「何うですか」といふ他を馬鹿にした生返事になるので、彼は一寸口籠つた後、

「さうです御通知のあつた人丈は漸と探し當てました」と答へた。
「眉間に黒子がありましたか」

敬太郎は少し隆起した黒い肉の一點を局部に認めたと答へた。
「衣服も此方から云つて上げた通りでしたか。黒の中折に、霜降の外套を着て」

「さうです」

「夫ぢや大抵間違はないでせう。四時と五時の間に小川町で降りたんですね」

「時間は少し後れた様です」

「何分位」

「何分か知りませんが、何でも五時餘つ程過ぎの様でした」
「餘つ程過ぎ。餘つ程過ぎならそんな人を待つてゐなくても好いちやありません」

か。四時から五時迄の間と、わざ／＼時間を切つて通知して上げた位だから、五時を過ぎればもう貴方の義務は済んだも同然ぢやないですか。何故其儘歸つて、其通り報知しないんです」
今迄穩かに機嫌よく話してゐた長者から突然斯う手厳しく遣り付けられようとは、敬太郎は夢にも思はなかつた。

(三)

敬太郎は今迄下町出の旦那を眼の前に描いてゐた。夫が突然規律づくめの軍人として彼を威壓して來た時、彼は忽ち心の中心を狂はした。友達に對してなら云ひ得る「君の爲だから」といふ言葉も挨拶も有つてゐたのだが、此場合には夫が丸で役に立たなかつた。

「たゞ私の勝手に、時間が來ても其處を動かかなかつたのです」

敬太郎が斯う答へるか答へないうちに、田口は今の屹とした態度をすぐ崩して、

『そりや私の爲に大變都合が好かつた』と機嫌の好い調子で受けたが、『然し貴方の勝手と云ふのは何です』と聞き返した。敬太郎は少し逡巡した。『なに夫や聞かないでも構ひません。貴方の事だから。話したくなければ話さないでも差支ない』

田口は斯う云つて、自分の前に引付けた手提煙草盆の抽斗を開けると、其中から角で出来た細長い耳搔を捜し出した。それを右の耳の中へ入れて、左も痒ゆさうに搔き廻した。敬太郎は見ない振をしてわざと自分を見てゐるやうな、又耳丈に氣を取られてゐるやうな、田口の蹙面を薄氣味悪く感じた。『實は停留所に女が一人立つてゐたのです』と彼はとう／＼自白して仕舞つた。

『年寄ですか、若い女ですか』

『若い女です』

『成程』

田口はたゞ一口斯う云つた丈で、何とも後を繼いで呉れなかつた。敬太郎も頓挫したなり言葉を途切らした。二人はしばらく差向ひの儘口を聞かずにゐた。

『いや、若からうが年寄だらうが、其婦人の事を聞くのは可くなかつた。夫は貴方丈に關係のある事なんでせうから、止しにしませう。私の方ぢや唯顔に黒子のある男に就いて、研究の結果さへ伺へば可いんだから』
『然し其女が黒子のある人の行動に始終入り込んでくるのです。第一女の方で男を待ち合はしてゐたのですから』

『はあ』

田口は一寸思ひも寄らぬといふ顔付をしたが、『ぢや其婦人は貴女の御知合でも何でもないのですね』と聞いた。敬太郎は固より知合だと答へる勇氣を

有たなかつた。極りの悪い思ひをしても、見た事も口を利いた事もない女だと正直に云はなければならなかつた。田口はさうですかと、穩かに敬太郎の返事を聞いた丈で、少しも追窮する氣色を見せなかつたが、急に摧けた調子になつて、

『何んな女なんです。其若い婦人と云ふのは。器量からいふと』と興味に充ちた顔を提烟草盆の上に出した。

『いえ、なに、詰らない女なんです』と敬太郎は前後の行き掛り上答へて仕舞つて、實際頭の中でも詰らない様な氣がした。是が相手と場合次第では、うん器量は中々好い方だ位は固より云ひ兼ねなかつたのである。田口は『詰らない女』といふ敬太郎の判断を聞いて、忽ち大きな聲を出して笑つた。敬太郎には其意味が能く解らなかつたけれども、何でも頭の上で大濤が崩れたやうな心持がして、幾分か顔が熱くなつた。

『宜御座んす、夫で。』——夫から何うしました。女が停留所で待ち合はして

ゐる所へ男が来て』

田口は又普通の調子に戻つて眞面目に事件の經過を聞かうとした。實をいふと敬太郎は自分が是から話す顛末を何うして握る事が出来たかの苦心談を、先づ冒頭に敷衍して、二つある同じ名の停留所に迷つた事から、不思議な謎の活きて働く洋杖を、何う抱へ出して、何う利用したかに至る迄を、自分の手柄の成るべく重く響く様に、詳しく述べたかつたのであるが、會ふや否や四時と五時との行擲で遣られた上に、勝手に見張りの時間を延ばした源因になる例の女が、源因にも何にもならない見ず知らずの女だつたりした不味い所があるので、自分を廣告する勇氣は全く抜けてゐた。夫で男と女が洋食屋へ入つてから以後の事丈を極淡泊り話して見ると、宅を出る時自分が心配してゐた通り、少しも捕まへ所のない、恰も灰色の雲を一握り田口の鼻の先で開いて見せたと同じ様な貧しい報告になつた。

(四)

夫でも田口は別段厭な顔も見せなかつた。落付いた腕組を仕舞迄解かず、只ふんとか、成程とか、夫からとか云ふ繋ぎの言葉を、時々敬太郎の爲に投げ込んで呉れる丈であつた。其代り報告の結末が来ても、まだ何か豫期してゐる様に、今迄の態度を容易に變へなかつた。敬太郎は仕方なしに、「夫丈です。實際詰らない結果で御氣の毒です」と言譯を付け加へた。

「いや大分参考になりました。何うも御苦勞でした。中々骨が折れたでせう」田口の此挨拶の中に、大した感謝の意を含んでゐない事は勿論であつたが、自分が馬鹿に見えつゝある今の敬太郎には是丈の愛嬌が充分以上に聞えた。彼は辛うじて恥を搔かずに済んだといふ安心を此時漸く得た。同時に垂味の出来た氣分が、すぐ田口に向いて働き掛けた。

「一體あの人は何なんですか」

「さあ何でせうか。貴方は何う鑑定しました」

敬太郎の前には黒の中折を被つて、襟開の廣い霜降の外套を着た男の姿があり／＼と現はれた。其人の様子といひ言葉遣ひといひ歩き付といひ、何か何迄判切見えたには見えだが、田口に對する返事は一口も出て來なかつた。

「何うも分りません」

「ぢや性質は何んな性質でせう」

性質なら敬太郎にも略見當が付いてゐた。「穩かな人らしく思ひました」と觀察の通りを答へた。

「若い女と話してゐる所を見て、さう云ふんぢやありませんか」

斯う云つた時、田口の唇の角に薄笑の影がちら付いてゐるのを認めた敬太

郎は、何か答へようとした口を又塞いで仕舞つた。

「若い女には誰でも優しいものですよ。貴下だつて滿更經驗のない事でもな

いでせう。ことに彼の男と來たら、人一倍左うなのかも知れないから』と田口は遠慮なく笑ひ出した。けれども笑ひながらちやんと敬太郎の上に自分の眼を注いでゐた。敬太郎は傍で自分を見たら嘸氣の利かない愚物になつてゐるんだらうと考へながらも、矢つ張り苦しい思ひをして田口と共に笑はなければ居られなかつた。

『ぢや女は何物なんでせう』

田口は此處で觀察點を急に男から女へ移した。さうして今度は自分の方で敬太郎に斯ういふ質問を掛けた。敬太郎はすぐ正直に『女の方は男よりも猶分り悪いです』と答へて仕舞つた。

『素人だか黒人だか、大體の區別さへ付きませんか』

『左様』と云ひながら、敬太郎は一寸考へて見た。草の手袋だの、白い襟巻だの、美しい笑ひ顔だの、長いコートだの、續々記憶の表面に込み上げて來たが、それを綜括つた所で何處からも此間に應ぜられる様な要領は得られな

かつた。

『割合に地味なコートを着て、草の手袋を穿めて居ましたが……』

女の身に着けた品物の中で、特に敬太郎の注意を惹いた此二點も、田口には何の興味も與へないらしかつた。彼はやがて眞面目な顔をして、『ぢや男と女の關係に就いて何か御意見はありませんか』と聞き出した。

敬太郎は先刻自分の報告が滞りなく濟んだ證據に、御苦勞さまと云ふ謝辭さへ受けた後で、斯う難問が續發しようとは毫も思ひ掛けなかつた。しかも窮してゐる所爲か、それが順を逐つて段々六かしい方へ競り上つて行く様に感ぜられてならなかつた。田口は敬太郎の行き詰つた様子を見て、再び同じ問を外の言葉で説明して呉れた。

『例へば夫婦だとか、兄弟だとか、又はたゞの友達だとか、情婦だとかですね。色々な關係があるうちで何だと思ひますか』

『私も女を見た時に、處女だらうか妻君だらうかと考へたんですが……然し

何うも夫婦ぢやない様に思ひます』

『夫婦でないにしてもですね。肉體上の關係があるものと思ひますか』

(五)

敬太郎の胸にも此疑ひは最初から多少萌さないでもなかつた。改めて自分の心を解剖して見たら、彼等二人の間に秘密の關係が既に成立してゐるといふ假定が遠くから彼を操つて、それが爲に偵察の興味が一段と鋭く研ぎ澄まされたのかも知れなかつた。肉と肉の間に起る此關係を外にして、研究に價する交渉は男女の間に起り得るものでないと主張する程彼は理論家ではなかつたが、暖かい血を有つた青年の常として、此觀察點から男女を眺めるときに、始めて男女らしい心持が湧いて來るとは思つてゐたので、成るべく其處を離れずに世の中を見渡したかつたのである。年の若い彼の眼には、人間と

いふ大きな世界があまり判切分らない代りに、男女といふ小さな宇宙は斯く鮮かに映つた。従つて彼は大抵の社會的關係を、出来る丈此一點迄切落して樂んでゐた。停留所で逢つた二人の關係も、敬太郎の氣の付かない頭の奥では、既に斯ういふ一對の男女として最初から結び付けられてゐたらしかつた。彼は又其背後に罪惡を想像して要もないのに恐れを抱く程の道徳家でもなかつた。彼は世間並な道義心の所有者として有り觸れた人間の一人であつたけれども、其道義心は彼の空想力と違つて、いざといふ場合にならなければ働らかないのを常とするので、停留所の二人を自分に最も興味のある男女關係に引直して見ても、別段不愉快にはならず濟んだのである。彼はたゞ年齢の上にて二人の相違の著るしいのを疑つた。が、又一方では其相違が却て彼の眼に映ずる『男女の世界』なるものゝ特色を濃く示してゐる様にも見え

た。
彼の二人に對する心持は知らず／＼の間に斯う弛んでゐたのだが、愈さう

かと正式に田口から質問を掛けられて見ると、断然とした返答は、責任のあ
るなしに拘らず、纏まつた形となつて頭の中には現れ悪かつた。それで斯う
云つた。――

『肉體上の關係はあつても知れませんが、無いかも分りません』

田口は唯微笑した。其處へ例の袴を穿いた書生が、一枚の名刺を盆に載せ
て持つて来た。田口は一寸夫を受取つた儘、『まわ分らない所が本當でせう』
と敬太郎に答へたが、すぐ書生の方を見て、『應接間へ通して置いて……』と
命令した。先刻から餘程窮してゐた矢先だから、敬太郎はこの來客を好い機
に、もう此處で切り上げようと思つて身繕ひに掛かると、田口はわざ／＼彼
の立たない前に夫を遮つた。さうして敬太郎の辟易するのに頓着なく猶質問
を進行させた。其内で敬太郎の明瞭に答へられるのは殆んど一ヶ條もなかつ
たので、彼は大學で受けた口答試験の時よりもまだ辛い思ひをした。
『ぢや是限にしますが、男と女の名前は分りましたらう』

田口の後最と斷つた此間に對しても、敬太郎は固より満足な返事を有つて
ゐなかつた。彼は洋食店で二人の談話に注意を拂ふ間にも何々さんとか何々
子とか或は御何とかいふ言葉が屹度何處へか交つて來るだらうと心待に待て
ゐたのだが、彼等は特にそれを避ける必要でもあつたのである。御互の名は勿論、
第三者の名も決して引合にさへ出さなかつたのである。

『名前も全く分りません』

田口は此答を聞いて、手焙の胴に當てた手を動かしながら、拍子を取るや
うに、指先で桐の縁を敲き始めた。それを少時繰り返した後で、『何うしたん
だか餘まり要領を得ませんね』と云つたが、直言葉を繼いで、『然し貴方は正
直だ。其處が貴方の美點だらう。分らない事を分つた様に報告するよりも餘
程好いかも知れない。まわ買へば其處を買ふんですね』と笑ひ出した。敬太
郎は自分の觀察が、果して實用に向かなかつたのを發見して、多少わが迂闊
に恥ぢ入る氣も起つたが、然し僅か二三時間の注意と忍耐と推測では、たと

ひ自分より十層倍行き届いた人間に代理を頼んだ所で、田口を満足させる様な結果は得られる譯のものでないと固く信じてゐたから、此評價に對して夫程の苦痛も感じなかつた。其代り正直を賞められた事も大した嬉しさにはならなかつた。此位の正直さ加減は全くの世間並に過ぎないと彼には見えたからである。

(六)

敬太郎は先刻から頭の上らない田口の前で、たつた一言で好いから、思ひ切つた自分の腹をずばりと云つて見たいと考へてゐたが、此處で云はなければ最う云ふ機會はあるまいといふ氣が此時不圖萌した。

「要領を得ない結果許で私も甚だお氣の毒に思つてゐるんですが、貴方のお聞きになる様な立ち入つた事が、あれ丈の時間で、私の様な迂濶なものに見

極められる譯はないと思ひます。斯ういふと生意氣に聞えるかも知れませぬが、あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直に會つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手数が省けて、さうして動かない確な所が分りやしないかと思ふのです」

是丈云つた敬太郎は、定めて世故に長けた相手から笑はれるか、冷かされる事だらうと考へて田口の顔を見た。すると田口は案外にも寧ろ真面目な態度で「貴方に夫丈の事が解つてゐましたか。感心だ」と云つた。敬太郎はわざと答を控へてゐた。

「貴方のいふ方法は最も迂濶の様で、最も簡便な又最も正當な方法ですよ。其處に氣が付いて居れば人間として立派なものです」と田口が再び繰返した時、敬太郎は益返答に窮した。

「夫程の考へがちやんとある貴方に、あんな詰まらない仕事をお頼み申したのは私が悪かつた。人物を見損なつたのも同然なんだから。が、市藏が貴方

を紹介する時に、さう云ひましたよ。貴方は探偵の遣るやうな仕事に興味を有つてお出だつて。夫でね、つい飛んでもない事をお願いして。止しやあ可かつた……」

「いえ須永君にはさう云ふ意味の事を慥かに話した覚えがあります」と敬太郎は苦しい思ひをして答へた。

「左様でしたか」

田口は敬太郎の矛盾を此一句で切り棄てたなり、失以上に追窮する愚を敢てしなかつた。さうして問題をすぐ改めて見せた。

「ぢや何うでせう。黙つて後などを跟けずに、貴方のいふ通り尋常に玄關から掛つて行つちや。貴方に夫丈の勇氣がありますか」

「無い事もありません」

「あんなに跟け廻した後で」

「あんなに跟け廻したつて、私はあの人達の不名譽になる様な観察は決して

爲てゐない積です」

「御尤もだ。そんなら一つ行つて御覧なさい。紹介するから」

田口は斯う云ひながら、大きな聲を出して笑つた。けれども敬太郎には此申し出が萬更の冗談とも思へなかつたので、彼は紹介状を携へて本當に眉間の黒子と向き合つて話して見ようかといふ料簡を起した。

「會ひますから紹介状を書いて下さい。私は彼の人と話して見たい氣がしますから」

「宜いでせう。是も経験の一つだから、まあ會て直に研究して御覧なさい。貴方の事だから田口に頼まれて此間の晩後を跟けました位屹度云ふでせう。

然し夫は構はない。云ひたければ云つても宜う御座んす。私に遠慮は要らないから。夫から彼の女との關係もです、貴方に勇氣さへあるなら聞いて御覧なさい。何うです、それを聞く丈の度胸が貴方にありますか」

田口は此處で一寸言葉を切らして敬太郎の顔を見たが、答の出ないうちに

又自分から話を續けた。

「だが兩方とも口へ出せる様に自然が持ち掛けて来る迄は、聞いても話しても不可せんよ。いくら勇氣があつたつて、常識のない奴だと思はれる丈だから。夫所ぢやない、彼の男は唯でさい随分會ひ悪い方なんだから、そんな事を無暗に喋べらうものなら、直歸つて呉れ位云ひ兼ねないですよ。紹介をして上る代りには、其處いらは能く用心しないとね……」

敬太郎は固より畏まりましたと答へた。けれども腹の中では黒の中折の男を田口の様に見る事が何しても出来なかつた。

(七)

田口は硯箱と巻紙を取り寄せて、さらさらと紹介状を書き始めた。やがて名宛を認め終ると、「たゞ通り一遍の文言丈並べて置いたら夫れで好いでせう」

と云ひながら、手焙の前に翳した手紙を敬太郎に讀んで聞かせた。其中には書いた當人の自白した如く、是といつて特別の注意に價する事は少しも出て來なかつた。只此者は今年大學を卒業した許の法學士で、殊によると自分が世話をしなければならぬ男だから、何うか會つて話をして遣つて呉れとある丈だつた。田口は異存のない敬太郎の顔を見届けた上で、すぐ其巻紙をぐるぐると巻いて封筒へ入れた。それから其表へ松本恒三様と大きく書いたなり、わざと封をせずに敬太郎に渡した。敬太郎は眞面目になつて松本恒三様の五字を眺めたが、肥つた締りのない書體で、此人が斯んな字を書くかと思ふ程拙らしく出来てゐた。

「さう感心して何時迄も眺めてゐちやあ不可ない」

「番地が書いてない様ですが」

「あゝ左うか。そいつは私の失念だ」

田口は再び手紙を受け取つて、名宛の人の住所と番地を書き入れて呉れた。

「さあ是なら好いでせう。不味くつて大きな所は土橋の大壽司流とでも云ふのかな。まあ役に立ちさへすれば可からう、我慢なうら」

「いえ結構です」

「序に女の方へも一通書きませうか」

「女も御存じなのですか」

「ことによると知つてるかも知れません」と答へた田口は何だか意味のありさうに微笑した。

「御差支さへなければ、御序に一本書いて頂いても宜しう御座います」と敬太郎も冗談半分に頼んだ。

「まあ止した方が安全でせうね。貴方のやうな年の若い男を紹介して、もし間違ひでも出ると責任問題だから。浪漫—何とか云ふぢやありませんか、貴方のやうな人の事を。私や學問がないから、今頃流行るハイカラな言葉を直忘れちまつて困るが、何とか云ひましたつけね、あの、小説家の使ふ言葉を

は……」

敬太郎はまさか夫りや斯う云ふ言葉でせうと教へる氣にもなれなかつた。唯エへ、と馬鹿見た様に笑つてゐた。さうして長居をすればする程、段々非道く冷かされさうなので、心の内では、此一段落が付いたら、早く切り上げて歸らうと思つた。彼は田口の呉れた紹介状を懐に收めて、「では二三日内には持つて行つて参りませう。其模様で又伺ふ事に致しますから」と云ひながら、柔かい座蒲團の上を滑り下りた。田口は「何うも御苦勞でした」と丁寧に挨拶した丈で、ロマンチックもコスメチックも悉皆忘れてしまつたといふ顔付をして立ち上つた。

敬太郎は歸り途に、今會つた田口と、是から會はうといふ松本と、夫から松本を待ち合はした例の恰好の可い女とを、合せたり離したりして頻りに其關係を考へた。さうして考へれば考へる程一歩宛迷宮の奥に引き込まれる様な面白味を感じた。今日田口での獲物は松本といふ名前であるが、此名前

が色々に錯綜した事實を自分の爲に締め括つてゐる妙な囊の様に彼には思へるので、其處から何が出るか分らない丈夫彼には樂みが多かつた。田口の説明によると、近寄悪い人の様にも聞こえるが、彼の見た所では田口より數倍話しが爲易さうであつた。彼は今日田口から得た印象のうち、人を取投ふ點に掛けて成程老練だといふ嘆美の聲を見出した上、人物としても何處か偉さうに思はれる點が、時々彼の眼を射る様にちら／＼輝いたにも拘らず、其前に坐つてゐる間、彼は始終何物にか縛られて自由に動けない窮屈な感じを取り去る事が出来なかつた。絶えず監視の下に置かれた様な此状態は、一時性のものでなくつて、幾何面會の度數を重ねても、決して薄らぐ折はなからうと迄彼には見えた位である。彼は斯ういふ風に氣の置ける田口と反對の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られさうにない、話し聲其物のうちに既に懐かし味の籠つた様な松本を想像して已まなかつた。

(八)

翌朝早速支度をして松本に會ひに行かうと思つてゐると生憎寒い雨が降り出した。窓を細目に開けて高い三階から外を見渡した時分には、もう世の中が一面に濡れてゐた。屋根瓦に徹る様な侘びしい色をしばらく眺めてゐた敬太郎は、田口の紹介狀を机の上に置いて、出ようか止さうかと一寸思案したが、早く會つて見たいといふ氣が強くなるので、とう／＼机の前を離れた。さうして豆腐屋の喇叭が、陰氣な空氣を割いて鋭く往來に響く下の方へ降りて行つた。

松本の家は矢來なので、敬太郎は此間の晩狐に撮まれたと同じ思ひをした交番下の景色を想像しつつ、其處へ來ると、坂下と坂上が兩方共二股に割れて、勾配の付いた真中丈がいびつに膨れてゐるのを發見した。彼は寒い雨の袴の裾に吹き掛けるのも厭はずに足を留めて、あの晩車夫が棍棒を握つた儘

立往生をしたのは此邊だらうと思ふ所を見廻した。今日も同じ様に雨がざわざわ落ちて、彼の踏んでゐる土は地下の鉛管迄腐れ込ひ程濡れてゐた。たゞ晝丈に周囲は暗いながらも明かるいので、立ち留つた時の心持は此間とは丸で趣が違つてゐた。敬太郎は後の方に高く黒ずんでゐる目白臺の森と、右手の奥に朦朧と重なり合つた水稻荷の木立を見て坂を上つた。それから同じ番地の家の何軒でもある矢來の中をぐる／＼歩いた。始のうちは小さい横町を右へ折れたり左へ曲つたり、濡れた枳殻の垣を覗いたり、古い椿の生ひ被さつてゐる墓地らしい構の前を通つたりしたが、松本の家は容易に見當らなかつた。仕舞に尋ねあぐんで、ある横町の角にある車屋を見付けて、其處の若い者に聞いたら、何でもない事の様ですぐ教へて呉れた。

松本の家は此車屋の筋向ふを這入つた突當りの、竹垣に圍はれに綺麗な住居であつた。門を潜ると子供が太鼓を鳴らしてゐる音が聞こえた。立關に掛つて案内を頼んでも其太鼓の音は毫も已まなかつた。其代り四邊は森閑とし

て人の住んでゐる臭さへしなかつた。雨に鎖された家の奥から現はれた十六七の下女は、手を突いて紹介状を受取つたなり無言の儘引つ込んだが、少時してから又出て来て、『甚だ勝手を申し上げて済みませんで御座います、雨の降らない日に御出を願へますまいか』と云つた。今近就職運動のため諸方へ行つて断られ付けてゐる敬太郎にも、此断り方丈は不思議に聞こえた。彼は何故雨が降つては面會に差支へるのか直反問したくなつた。けれども下女に議論を仕掛けるのも一種變な場合なので、『ぢや御天氣の日に伺へば御目に掛かれるんですね』と念晴しに聞き直して見た。下女は唯『は』と答へた丈であつた。敬太郎は仕方なしに又雨の降る中へ出た。ざわと云ふ音が急に烈しく聞こえる中に、子供の鳴す太鼓が未だどん／＼と響いてゐた。彼は矢來の坂を下りながら變な男が有つたものだといふ觀念を數度繰り返した。田口が唯でさへ會ひ悪いと云つたのは、斯んな所を指すのではなからうかとも考へた。其日は家へ歸つても、氣分が中止の姿勢に餘儀なく据ゑ付けられた儘、

何の方角へも進行出来ないのが苦痛になつた。久し振に須永の家へでも行つて、此間からの顛末を茶話に半日を暮らさうかと考へたが、何うせ行くなら、今の仕事に一段落付けて、自分にも見當の立つた筋を吹聴するのでなくては話しばえもしないので、遂に行かず仕舞にしてしまつた。

翌日は昨日と打つて變つて好い天気になつた。起き上る時、あらゆる濁を雨の力で洗ひ落した様に綺麗に輝く蒼空を、眩ゆさうに仰ぎ見た敬太郎は、今日こそ松本に會へると喜んだ。彼は此間の晩行李の後に隠して置いた例の洋杖を取り出して、今日は一つ是を持つて行つて見ようと考へた。彼はそれを突いて、又矢來の坂を上りながら、昨日の下女が今日も出て来て、折角です。今日は御天氣過ぎますから、最少し曇つた日に御出下さいましと云つたら何んなものだらうと想像した。

(九)

所が昨日と違つて、門を潜つても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかつた。玄關には此前目に着かなかつた衝立が立てゐた。其衝立には淡彩の鶴がたつた一羽佇ずんでゐる丈で、妾見の様に細長い其格好が、普通の寸法と違つてゐる意味で敬太郎の注意を促がした。取次には例の下女が現はれたには相違ないが、其後から遠慮のない足音をどん／＼立て、二人の子供が衝立の影迄来て、珍らしさうな顔をして敬太郎を眺めた。昨日に比べると是丈の變化を認めれば、最後に何うぞといふ案内と共に、硝子戸の締まつてゐる座敷へ通つた。其真中にある金魚鉢の様に大きな瀬戸物の火鉢の兩側に、下女は座蒲團を一枚づゝ置いて、其一枚を敬太郎の席とした。其座蒲團は更紗の模様を染めた真丸の形をしたもので、敬太郎は不思議さうに其上へ坐つた。床の間には刷毛でがし／＼と粗末に書いた様な山水の軸が懸つてゐた。敬太郎は何處が樹で何處が巖だか見分けの付かない畫を、輕蔑に價する裝飾

品の如く眺めた。すると其隣に銅鑼が下つてゐて、それを叩く棒迄添へてゐるので、益變つた室だと思つた。

すると間の襖を開けて隣座敷から黒子のある主人が出て來た。「能く御出です」と云つたなり、すぐ敬太郎の鼻の先に坐つたが、其調子は決して愛嬌のある方ではなかつた。唯何處かおつとりして居るので、相手に餘り重きを置かない所が、却て敬太郎に樂な心持を與へた。それで火鉢一つを境に、顔と顔を突合はせながら、敬太郎は別段氣が詰まる思ひもせずにもせぬにゐられた。其上彼は此間の晩、慥かに自分の顔を此處の主人に覺えられたに違ないと思ひ込んでゐたにも拘はらず、今會つて見ると、覺えて居るのだから、居ないのだから、平然としてそんな素振は、口にも色にも出さないの、彼は猶更氣兼ねの必要を感じなくなつた。最後に主人は昨日雨天のため面會を謝絶した理由も言譯も一言も述べなかつた。述べ度なかつたのか、述べなくつても構はないと認めてゐたのか、夫すら敬太郎には丸で判斷が付かなかつた。

話は自然の順序として、紹介者になつた田口の事から始まつた。「貴方は是れから田口に使つて貰はうといふのでしたね」といふのを冒頭に、主人は敬太郎の志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。夫から彼の未だ嘗て考へた事もない、社會觀とか人生觀とかいふ小六づかしい方面の問題を、時々持出して彼を苦しめた。彼は其時心のうちで、此松本といふ男は世に著れない學者の一人なのではなからうかと疑つた位、妙な理窟をちら／＼と閃めかされた。夫許でなく、松本は田口を捕まへて、役には立つが頭の成つてゐない男だと罵しつた。

「第一あゝ忙しくしてゐちや、頭の中に組織立つた考への出来る閑がないから駄目です。彼奴の腦と來たら、年が年中摺鉢の中で、掃木に攪き廻されてる味噌見たやうなもんでね。あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」

敬太郎には何故此主人が田口に對して斯う迄惡體を吐くのか薩張譯が分らなかつた。けれども彼の不思議に感じたのは、是程の激語を放つ主人の態度

なり口調なりに、毫も毒々しい所だの、小悪らしい點だの、見えない事であつた。彼の罵る言葉は、人を罵つた経験を知らない様な落付を具へた彼の聲を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する氣になれなかつた。たゞ一種變つた人だといふ感じが新たに刺戟を受ける丈であつた。「夫でゐて、碁を打つ、謠を謠ふ。色々な事を遣る。尤も何れも下手糞なんですが」

「夫が餘裕のある證據ぢやないでせうか」

「餘裕つて君——僕は昨日雨が降るから天氣の好い日に來て呉れつて、貴方を斷つたでせう。其譯は今云ふ必要もないが、何しろそんな我儘な斷わり方が世間にあると思ひますか。田口だつたら左う云ふ斷り方は決して出来ない。田口が好んで人に會ふのは何故だと云つて御覽。田口は世の中に求める所のある人だからです。つまり僕の様な高等遊民でないからです。いくら他の感情を害したつて、困りやしないといふ餘裕がないからです」

(十)

「實は田口さんからは何にも伺はずに參つたのですが、今御使ひになつた高等遊民といふ言葉は本當の意味で御用ひなのですか」

「文字通りの意味で僕は遊民ですよ。何故」

松本は大きな火鉢の縁へ兩腕を掛けて、其の一方の先にある拳骨を顎の支へにしながらか敬太郎を見た。敬太郎は初對面の客を客と感じてゐないらしい。此松本の様子に、成程高等遊民の本色があるらしくも思つた。彼は煙草道樂と見えて、今日は大きな丸い雁首の付いた木製の西洋パイプを口から離さず、時々思ひ出した様な濃い煙を、まだ火の消えてゐない證據として狼煙の如くぱつぱつと揚げた。其煙が彼の顔の傍で何時の間にか消えて行く具合が、何處にも縮りを設ける必要を認めてゐないらしい彼の眼鼻と相待つて、今迄経験した事のない一種静かな心持を敬太郎に與へた。彼は少し薄くなりか、

つた髪を、頭の真中から左右へ分けてゐるので、平たい頭が猶の事尋常に落ち付いて見えた。彼は又普通世間の人が着ない様な茶色の無地の羽織を着て、同じ色の上足袋を白の上に重ねてゐた。其色がすぐ坊主の法衣を聯想させる所が又變に特別な男らしく敬太郎の眼に映つた。自分で高等遊民だと名乗るものに會つたのは是が始めてはあゝあるが、松本の風采なり態度なりが、如何にもさう云ふ階級の代表者らしい感じを、少し不意を打たれた氣味の敬太郎に投げ込んだのは事實であつた。

「失禮ながら御家族は大勢で入らつしやいますか」

敬太郎は自ら高等遊民と稱する人に對して、何ういふ譯か先づ斯ういふ問が掛けて見たかつた。すると松本は、「え、子供が澤山ゐます」と答へ、敬太郎の忘れ掛つてゐたパイプからぱつと煙を出した。

「奥さんは……」

「妻は無論居ます。何故ですか」

敬太郎は取り返しの付かない思な問を出して、始末に行かなくなつたのを後悔した。相手が夫程感情を害した様子を見せないにしろ、不思議さうに自分の顔を眺めて、解決を豫期してゐる以上は、何とか云はなければ濟まない場合になつた。

「貴方の様な方が、普通の人間と同じ様に、家庭的に暮して行く事が出来るかと思つて一寸伺つた迄です」

「僕が家庭的に……。何故。高等遊民だからですか」

「さう云ふ譯でも無いんですが、何だかそんな心持がしたから一寸伺つたのです」

「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」

敬太郎はもう何も云ふ事がなくなつて仕舞つた。彼の頭腦の中では、返事に行き詰まつた困却と、此處で問題を變へようとする努力と、これを緒口に、革の手袋を穿めた女の關係を確めたい希望が三つ一所に働らくので、元から

夫程秩序の立つてゐない彼の思想に猶更暗い影を投げた。けれども松本はそんな事に丸で注意しない風で、困つた敬太郎の顔を平氣に眺めてゐた。若し是れが田口であつたなら手際よく相手を打ち据ゑる代りに、打ち据ゑるとすぐ向ふから局面を變へて呉れて、相手に見苦るしい立往生などは決してさせない鮮やかな腕を有つてゐるのにと敬太郎は思つた。氣は置けないが、人を取扱かふ點に於て、全く冴えた熟練を缺いてゐる松本の前で、敬太郎は圖らず二人の相違を認められた様な氣がしてゐると、松本は偶然「貴方は左ういふ問題を考へて見た事がないやうですね」と聞いて呉れた。

「え、丸で考へて居ません」

「考へる必要は有ませんね。一人で下宿してゐる以上は、けれども幾何一人だつて、廣い意味での男對女の問題は考へるでせう」

「考へると云ふより寧ろ興味があるといつた方が適當かも知れません。興味なら無論有ります」

(十一)

二人は人間として誰しも利害を感じず此問題に就いて暫時話した。けれども年齒の遠だか段の遠だか、松本の云ふ事は肝心の肉を抜いた骨組丈を並べて見せる様で、敬太郎の血の中迄這入り込んで来て、共に流れなければ已まない程の切實な勢ひを丸で持つてゐなかつた。其代り敬太郎の秩序立たない斷片的の言葉も口を出るとすぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹らないらしかつた。

斯んな縁遠い話をしてゐる中で、たゞ一つの敬太郎の耳に新しく響いたのは露西亞の文學者のゴリキとかいふ人が、自分の主張する社會主義とかを實行する上に、資金の必要を感じて、それを調達のため細君同伴で亞米利加へ渡つた時の話であつた。其時ゴリキは大變な人氣を一身に集めて、招待やら歓迎やらに忙殺される程の景氣のうちに、自分の目的を苦もなく着々と進

行させつゝあつた。所が彼の本國から伴れて来た細君といふのが、本當の細君でなくて單に彼の情婦に過ぎないといふ事實が何處からか曝露した。すると今迄狂熱に達してゐた彼の名聲が、忽ちどさりと落ちて、廣い新大陸に誰一人として彼と握手するものが無くなつて仕舞つたので、ゴリキは已を得ず其儘亞米利加を去つた。といふのが筋であつた。

「露西亞と亞米利加では是丈男女關係の解釋が違ふんです。ゴリキの遣り口は露西亞なら殆ど問題にならない位些細な事件なんでせうがね。下らない」と松本は全く下らなさうな顔をした。

「日本は何方でせう」と敬太郎は聞いて見た。

「まゝ露西亞派でせうね。僕は露西亞派で澤山だ」と云つて、松本は又狼烟の様な濃い烟をばつと口から吐いた。

此處迄來て見ると、此間の女の事を尋ねるのが敬太郎に取つて少しも苦にならない様な氣がし出した。

「先達ての晩神田の洋食店で私は貴方に御目に懸つたと思ふんですが」

「え、會ひましたね。よく覚えてゐます。夫から歸りにも電車の中で會つたぢやありませんか。君も江戸川迄乗つた様だが、あすこいらに下宿でもしてゐるんですか。あの晩は雨が降つて困つたでせう」

松本は果して敬太郎を記憶してゐた。夫を初めから口に出すでもなく、今になつて漸く氣が付いた振をするでもなく、話しても可し話さないでも可しと云つた風の彼の態度が、無邪氣から出るのか、度胸から出るのか、又は鷹揚な彼の生れ付から出るのか、敬太郎には一寸判断しかねた。

「御伴が御有りの様でしたか」

「え、別嬪を一人伴れてゐました。貴方は慥か一人でしたね」

「一人です。貴方も御歸りには御一人ぢやなかつたですか」

「左うです」

一寸はきく／＼進んだ問答は此處へ來てびたりと留つて仕舞つた。松本が又

女の事を云ひ出すかと思つて待つてゐると、『貴方の下宿は牛込ですか、小石川ですか』と丸で無關係の問を敬太郎は掛けられた。

『本郷です』

松本は腑に落ちない顔をして敬太郎を見た。本郷に住んでゐる彼が、何故江戸川の終點迄乗つたのか、其説明を聞きたいと云はぬ許の松本の眼付を見た時、敬太郎は面倒だから此處で一つ心持よく萬事を打ち明けて仕舞はうと決心した。もし怒られたら、詫る丈で、詫つて聞かれなければ、御辭儀を叮嚀にして歸れば好からうと覺悟を極めた。

『實は貴方の後を跟けてわざ／＼江戸川まで來たのです』と云つて松本の顔を見ると、案外にも豫期した程の變化も起らないので、敬太郎は先づ安心した。

『何の爲に』と松本は殆んど何時もの様な緩い口調で聞き返した。
『人から頼まれたのです』

『頼まれた？誰に』

松本は始めて、少し驚いた聲の中に、並より強いアクセントを置いて、斯う聞いた。

(十二)

『實は田口さんに頼まれたのです』

『田口とは、田口要作ですか』

『左うです』

『だつて君はわざ／＼田口の紹介状を持つて僕に會ひに來たんぢやありませんか』

斯う一句々々問ひ詰められて行くよりは、自分の方で一と思ひに今迄の経過を話して仕舞ふ方が樂な氣がするので、敬太郎は田口の速達便を受取つて、

すぐ小川町の停留所へ見張に出た冒険の第一節目から始めて、電車が江戸川の終點に着いた後の雨の中の立往生に至る迄の顛末を包まず打ち明けた。固よりたゞ筋の通る丈を目的に、誇張は無論布衞の煩はしさも出来る限り避けたので、時間が夫程掛らなかつた所爲か、松本は話の進行してゐる間一口も敬太郎を遮らなかつた。話が済んでからも、直とは聲を出す様子は見えなかつた。敬太郎は主人の此沈黙を、感情を害した結果ではなからうかと推察して、怒り出されないうちに早く詫るに越した事はないと思ひ定めた。すると主人の方から突然口を利き始めた。

『どうも怪しからん奴だね、あの田口といふ男は。夫に使はれる君も亦君だ。餘つ程の馬鹿だね』

斯ういつた主人の顔を見ると、呆れ返つてゐる風は誰の目にも着くが、怒氣を帯びた様子は比較的何處にも表はれてゐないので、敬太郎は寧ろ安心した。此際馬鹿と呼ばれる位の事は、彼に取つて何でもなかつたのである。

『何うも悪い事をしました』

『詫つて貰ひたくも何ともない。只君が御氣の毒だから云ふのですよ。あんな者に使はれて』

『それ程悪い人なんですか』

『一體何の必要があつて、そんな愚な事を引き受けたのです』

物數奇から引き受けたといふ言葉は、此場合何うしても敬太郎の口へは出て來なかつた。彼は已を得ず、衣食問題の必要上何うしても田口に頼らなければならぬ事情があるので、面白くないとは知りながら、つい承諾したのだといふ風な答をした。

『衣食に困るなら仕方がないが、もう止した方が可いですよ。餘計な事ぢやありませんか、寒いのに雨に降られて人の後を跟けるなんて』

『私も少し懲りました。是からはもう遣らない積です』

此述懐を聞いた松本は何とも云はず、たゞ苦笑ひをしてゐた。それが敬太

郎には輕蔑の意味にも憐愍の意味にも取れるので、彼は何れにしても甚だ肩身の狭い思ひをした。

「貴方は僕に對して濟まん事をした様な風をしてゐるが、實際左うなのですか」

根本義に溯ぼつたら夫程に感じてゐない敬太郎も斯う聞かれると、行掛り上左うだと思はざるを得なかつた。又さう答へざるを得なかつた。

「ぢや田口へ行つてね。此間僕の件れてゐた若い女は高等淫賣だつて、僕自身がさう保證したと云つて呉れ玉へ」

「本當にさういふ種類の女なんですか」

敬太郎は一寸驚かされた顔をして斯う聞いた。

「まわ何でも好いから、高等淫賣だと云つて呉れ玉へ」

「はわ」

「はあぢや不可ない、儲かに左う云はなくつちや。云へますか、君」

敬太郎は現代に教育された青年の一人として、斯ういふ意味の言葉を年長者の前で口にする無遠慮を憚る程の男ではなかつた。けれども松本が強ひて此四字を田口の耳へ押し込まうとする奥底には、何か不愉快な或物が潜んでゐるらしく思はれるので、さう輕々しい調子で引受ける氣も起らなかつた。

彼が挨拶に困つて六づかしい顔をしてゐると、それを見た松本は、「何、君心配しないでも可いですよ。相手が田口だもの」と云つたが、暫くして漸と氣が付いた様に、「君は僕と田口との關係をまだ知らないんでしたね」と聞いた。敬太郎は「まだ何にも知りません」と答へた。

(十三)

「其關係を話すと、君が田口に向つてあの女の事を高等淫賣だと云ふ勇氣が出惡くなる丈だから詰り僕には損になるんだが、何時迄罪もない君を馬鹿に

するのにも氣の毒だから、聞かして上げよう』
 斯ういふ前置を置いた上、松本は田口と自分が社會的に何う交渉してゐるかを説明して呉れた。其説明は最も簡単に済む丈に最も敬太郎を驚かした。夫を一言でいふと、田口と松本は近い親類の間柄だつたのである。松本に二人の姉があつて、一人が須永の母、一人が田口の細君、といふ互の縁續きを始めて呑み込んだ時、敬太郎は、田口の義弟に當る松本が、叔父といふ資格で、彼の娘と時間を極めて停留所で待ち合した上、ある料理店で會食したといふ事實を、世間の出來事のうちに最も平凡を極めたものゝ一つの様に見た。それを込み入つた文でも隠してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、後を追掛けて歩いたのが、左もく馬鹿々々しくなつて來た。

「御嬢さんは何で又彼處迄出張つてゐたんですか。たい私を釣る爲めなんですか」

「何須永へ行つた歸りなんです。僕が田口で話してゐると、彼の子が電話を掛けて、四時半頃彼處で待ち合せてゐるから、一寸歸りに降りて呉れといふんです。面倒だから止さうと思つたけれども、是非何とか蚊とかいふから、降りた所がね。今朝御父さんから聞いたら、叔父さんが御歳暮に指環を買つて遣ると云つてゐたから、停留所で待ち伏せをして、逃さない様に一所に行つて買つて貰へると云はれたから先刻から此處で待つてゐたんだつて、人の知りもしないのに、一人で勝手な請求を持ち出して中々動かない。仕方がないから、まあ西洋料理店で胡魔化して置かうと思つて、とうく寶亭へ連れ込んだんです。——實に田口といふ男は籠棒だね。わざく夫程の手数を掛けて、何もそんな下らない眞似をするにも當らないぢやないか。騙された君よりも餘つ程田口の方が籠棒ですよ」

敬太郎には騙された自分の方が遙に愚物に思はれた。さうと知つたら、探偵の結果を報告する時にも、もう少しは手加減が出來たものをと、自から根

い顔もしなければならなかつた。

「貴方は丸で御承知ない事なんですね」

「知るものかね、君。いくら高等遊民だつて、そんな暇の出る筈がないぢやありませんか」

「御嬢さんは何うでせう。多分御存じなんだらうと思ひますが」

「左うさ」と云つて松本はしばらく思索してゐたが、やがて判切した口調で、

「いや知るまい」と断言した。『あの籠棒の田口に、一つ取柄があると云へば

云はれるのだが、彼の男はね、幾何悪戯をしても、其悪戯をされた當人が、

もう少しで恥を掻きさうな際どい時になると、びたりと留めて仕舞ふか、又

は自分が其場へ出て来て、當人の體面に拘はらない内に綺麗に始末を付ける。

其處へ行くと籠棒には違ないが感心な所があります。つまり遣方は悪辣でも、

結末には妙に温かい情の籠つた人間らしい點を見せて來るんです。今度の事

でも恐らく自分一人で呑み込んでゐる丈でせう。君が僕の家へ來なかつたら、

僕は屹度此事件を知らずに済むんだつたらう。自分の娘にだつて、君の馬鹿を證明する様な策略を、始めから吹聴する程無慈悲な男ぢやない。だから序に悪戯も止せば可いんだがね、夫が何うしても止せない所が、要するに籠棒です」

田口の性格に對する松本の斯ういふ批評を黙つて聞いてゐた敬太郎は、自分の馬鹿な振舞を顧みる後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨むよりも、寧ろ悪戯をした田口を頼もしいと思ふ心が、わが胸の裏で一番勝を制したのを自覺した。が、果して左ういふ人ならば、何故彼の前に出て話しをしてゐる間に、あんな窮屈な感じが起るのだらうといふ不審も自と萌さない譯に行かなかつた。

「貴方の御話で大分田口さんが解つて來た様ですが、私はあの方の前へ出ると、何だか氣が落付かなくなつて變に苦しいです」

「夫りや向ふでも君に氣を許さないからさ」

(十四)

斯う云はれて見ると、田口が自分に氣を許してゐない眼遣やら言葉付やらがあり／＼と敬太郎の胸に、疑ひもない記憶として讀まれた。けれども田口程の老巧のものに、何で學校を出た許の青臭い自分が、夫程苦になるのか、敬太郎は全く合點が行かなかつた。彼は見た通りの儘の自分で、誰の前へ出ても通用するものと今迄固く己れを信じてゐたのである。彼はたゞ斯様な青年として、他に憚られたり氣を置かれたりする資格さへない様に自分を見縊つてゐた丈に、經驗の程度の違ふ年長者から、自分の思はくと違ふ待遇を受けけるのを寧ろ不思議に考へ出した。

『私はそんな裏表のある人間と見えますかね』

『何うだか、そんな細かい事は初めて會つた丈ぢや分らないですよ。然し有

つても無くつても、僕の君に對する待遇には一向關係がないから可いぢやありませんか』

『けれども田口さんから左う思はれちや…』

『田口は君だから左う思ふんぢやない、誰を見ても左う思ふんだから仕方がないさ。あゝして長い間人を使つてゐるうちには、大分騙されなくつちやならないからね。偶に自然其儘の美しい人間が自分の前に現れて來ても、矢張り氣が許せないんです。夫があゝ云ふ人の因果だと思へば夫で好いぢやないか。田口は僕の義兄だから、斯う云ふと變に聞えるが、本來は美質なんです。決して悪い男ぢやない。唯あゝして何年となく事業の成功といふ事丈を重に眼の中に置いて、世の中と闘つてゐるものだから、人間の見方が妙に片寄つて、此奴は役に立つだらうかとか、此奴は安心して使へるだらうかとか、まあそんな事ばかり考へてゐるんだね。あゝなると女に惚れられても、是や自分に惚れたんだらうか、自分の持つてゐる金に惚れたんだらうか、直其處を疑ぐ

らなくつちや居られなくなるんです。美人でさへ左うなんだから君見たいな野郎が窮屈な取扱を受けるのは當然だと思はなくつちや不可ない。其處が田口の田口たる所なんだから」

敬太郎は此批評で田口といふ男が自分にも判切呑み込めた様な気がした。けれども斯ういふ風に一々彼を肯はせる程の判断を、彼の頭に鐵槌で叩き込む様に入れて呉れる松本は抑何者だらうか、其點になると敬太郎は依然として茫漠たる雲に對する思ひがあつた。批評に上らない前の田口でさへ、此男よりは却つて活きた人間らしい気がした。

同じ松本に就いて見ても、此間の晩神田の洋食屋で、田口の娘を相手にして珊瑚樹の珠が何うしたとか斯うしたとか云つてゐた時の方が、餘つ程活きて動いてゐた。今彼の前に坐つてゐるのは、大なバイブを銜へた木像の靈が、口を利くと同じ様な感じを敬太郎に與へる丈なので彼はたゞ其人の本體を髣髴するに苦しむに過ぎなかつた。彼が一方では明瞭な松本の批評に心服しな

がら、一方では松本の何物なるかを斯ういふ風に考へつゝ、自分は頭腦の悪い、直覺の鈍い、世間並以下の人物ぢやあるまいかと疑ぐり始めた時、此漠然たる松本が又口を開いた。

「夫でも田口が笥棒を遣つて呉た爲、君は却て仕合をした様なものですね」
「何故ですか」

「屹度何か位置を拵へて呉れますよ。是なりで放つて置きや田口でも何でもありやしない。夫は責任を持つて受合つて上げて宜い。が、詰らないのは僕だ。全く探偵のされ損だから」

二人は顔を見合せて笑つた。敬太郎が丸い更紗の座蒲團の上から立ち上がつた時、主人はわざ／＼玄關迄送つて出た。其處に飾つてあつた墨繪の鶴の衝立の前に、拵せた高い身體をしばらく佇まして、靴を穿く敬太郎の後姿を眺めてゐたが、「妙な洋杖を持つてゐますね。一寸拜見」と云つた。さうして夫を敬太郎の手から受取つて、「へえ、蛇の頭だね、中々旨く刻つてゐる。」

「買ったんですか」と聞いた。「いえ素人が刻つたのを貰つたんです」と答へた
敬太郎は、夫を振りながら又矢來の坂を江戸川へ下つた。

雨の降る日

(一)

雨の降る日に面會を謝絶した松本の理由は、遂に當人の口から聞く機會を得ず
に久しく過ぎた。敬太郎も其内に取り紛れて忘れて仕舞つた。不圖それを耳にしたのは、
彼が田口の世話で、ある地位を得たのを縁故に、遠慮なく同家へ出入の出来る身になつてからの事である。其時分の彼の頭には、停留所の
經驗が既に新しい匂ひを失ひ掛けてゐた。彼は時々須永から其話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかつた。
須永はよく彼に向つて、何故其前に僕の前へ来て打ち明けなかつたのだと詰問した。内辛町の叔父が人を擔ぐ位の事は、
母から聞いて知つて居る筈だのにと窘める事もあつた。仕舞には、君があんまり色氣が有り過ぎるからだと謂ひ出した。敬太郎は其度に「馬

鹿云へ』で通してゐたが、心の内では毎も、須永の門前で見た後姿の女を思ひ出した。其女が取も直さず停留所の女であつた事も思ひ出した。さうして何處か遠くの方で氣恥かしい心持がした。其女の名が千代子で、其妹の名が百代子である事も、今の敬太郎には珍らしい報知ではなかつた。

彼が松本に會つて、凡て内幕の消息を聞かされた後、田口へ顔を出すのは多少極りの悪い思をする丈であつたに拘はらず、顔を出さなければ締り括りが付かないといふ行き掛りから、笑はれるのを覺悟の前で、又田口の門を潜つた時、田口は果して大きな聲を出して笑つた。けれども其笑ひの中には己の機略に誇る高慢の響よりも、迷つた人を本來の路に返して遣つた喜びの勝利が聞えてゐるのだと敬太郎には解釋された。田口は其時訓戒の爲だとか教育の方法だとかいつた風の、恩に着せた言葉を一切使はなかつた。たゞ惡意でした譯でないから、怒つては不可ないと斷つて、すぐ其場で相當の位置を拵へて呉れる約束をした。それから手を鳴らして、停留所に松本を待ち合は

せてゐた方の姉娘を呼んで、是が私の娘だとわざ／＼紹介した。さうして此方は市さんの御友達だよと云つて敬太郎を娘に教へてゐた。娘は何で斯ういふ人に引き合されるのか、一寸解しかねた風をしながら、極めて餘所々々しく叮嚀な挨拶をした。敬太郎が千代子といふ名を覺えたのは其時の事であつた。

是が田口の家庭に接觸した始めての機會になつて、敬太郎は其後も用事なり訪問なりに縁を藉りて、同じ人の門を潜る事が多くなつた。時々は玄關脇の書生部屋へ這入て、嘗て電話で口を利き合つた事のある書生と世間話さへした。奥へも無論通る必要が生じて來た。細君に呼ばれて内向の用を足す場合もあつた。中學校へ行く長男から英語の質問を受けて窮する事も稀ではなかつた。出入の度敷が斯う重なるにつれて、敬太郎が二人の娘に接近する機會も自然多くなつて來たが、一種間の延びた彼の調子と、比較的引き締つた田口の家風と、差向ひで坐る時間の缺乏とが、容易に打ち解け難い境遇に彼等

を置き去りにした。彼等の間に取り換はされた言葉は、無論形式丈を重んずる堅苦しいものではなかつたが、大抵は五分と掛からない常用に過ぎないの
 で、親しみは夫程出る暇がなかつた。彼等が公然と膝を突き合はせて、例に
 なく長い時間を、遠慮の交らない談話に更かしたのは、正月半ばの歌留多會
 の折であつた。其時敬太郎は千代子から、貴方随分鈍いのねと云はれた。百
 代子からは、妾貴方と組むのは厭よ、負けるに極つてゐるからと怒られた。
 夫から又一ヶ月程経つて、梅の音信の新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の
 午後を、久し振に須永の二階で暮した時、偶然遊びに来てゐた千代子に出逢
 つた。三人して夫から夫へと纏まらない話を續けて行くうちに、不圖松本の
 評判が千代子の口の上つた。
 『あの叔父さんも随分變つてるのね。雨が降ると一しきり能く御客を断つた
 事があつてよ。今でも左うか知ら』

(二)

『實は僕も雨の降る日に行つて断られた一人なんだが……』と敬太郎が云ひ
 出した時、須永と千代子は申し合せた様に笑ひ出した。
 『君も随分運の悪い男だね。大方例の洋杖を持つて行かなかつたらう』
 と須永は調戲ひ始めた。
 『だつて無理だわ、雨の降る日に洋杖なんか持つて行けつたつて。ねえ田川
 さん』
 此理攻めの辯護を聞いて、敬太郎も苦笑した。
 『一體田川さんの洋杖つて、何んな洋杖なの。妾一寸見たいわ。見せて頂戴
 ね、田川さん。下へ行つて見て来てても好くつて』
 『今日は持つて来ません』
 『何故持つて来ないの。今日は貴方夫でも好い御天氣よ』

『大事な洋杖だから、いくら好い御天氣でも、只の日には持つて出ないんだとさ』

『本當？』

『まあ其んなものです』

『ぢや旗日に丈突いて出るの』

敬太郎は一人で二人に當つてゐるのが少し苦しくなつた。此次内幸町へ行く時は、屹度持つて行つて見せるといふ約束をして漸く千代子の追窮を逃れた。其代り千代子から何故松本が雨の降る日に面會を謝絶したかの原因を話して貰ふ事にした。

夫は珍らしく秋の日の曇つた十一月のある午過であつた。千代子は松本の好きな雲丹を母から言付かつて矢來へ持つて來た。久し振に遊んで行かうか知らと云つて、わざ／＼乗つて來た車迄返して、緩くり腰を落ち付けた。松本には十三になる女を頭に、男、女、男と互違に順序よく四人の子が揃つて

ゐた。是等は皆二つ違ひに生れて、何れも世間並に成長しつゝあつた。家庭に華やかな匂を着ける此生き／＼した裝飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子を、指環に嵌めた真珠の様に大事に抱いて離さなかつた。彼女は真珠の様に透明な青白い皮膚と、漆の様に濃い大きな眼を有つて、前の年の雛の節句の前の宵に松本夫婦の手に落ちたのである。千代子は五人のうちで、一番この子を可愛がつてゐた。來る度に屹度何か玩具を買つて來て遣つた。或時は餘り多量に甘いものを當がつて叔母から怒られた事さへある。すると千代子は、大事さうに宵子を抱いて縁側へ出て、ねえ宵子さんと言つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑ひながら、何だね喧嘩でもしやしましと云つた。松本は、お前そんなに其子が好なら御祝ひの代りに上るから、嫁に行くとき持つて御出と調戲つた。其日も千代子は坐ると直宵子を相手にして遊び始めた。宵子は生れてからついで月代を剃つた事がないので、頭の毛が非常に細く柔かに延びてゐた。

さうして皮膚の青白い所爲か、其髪の色が日光に照らされると、潤澤の多い紫を含んでびか／＼縮れ上つてゐた。「宵子さんかん／＼結つて上ませう」と云つて、千代子は鄭寧に其縮れ毛に櫛を入れた。それから乏しい片髪を一束割いて、其根本に赤いリボンを括り付けた。宵子の頭は御供の様に平らに丸く開いてゐた。彼女は短かい手をやつと其御供の片隅へ乗せて、リボンの端を抑へながら、母のゐる所迄よた／＼歩いて来て、イボン／＼と云つた。母が「あ、好くかん／＼が結へましたねと賞めると、千代子は嬉しさに笑ひながら、子供の後姿を眺めて、今度は御父さんの所へ行つて見せて入らつしやいと指圖した。宵子は又足元の危ない歩き付をして、松本の書齋の入口迄来て、四つ這になつた。彼女が父に禮をするときには必ず四つ這になるのが例であつた。彼女は其處で自分の尻を出来る丈高く上げて、御供の様な頭を敷居から二三寸の所迄下げて、又イボン／＼と云つた。書見を一寸已めた松本が、あ、好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頸を下げた儘、ちい

ちいと答へた。ちい／＼と云ふのは舌の廻らない彼女の千代子と呼ぶ常の符徴であつた。後に立つて見てゐた千代子は小さい唇から出る自分の名前を聞いて、又嬉しさに大きな聲で笑つた。

(三)

其内子供がみんな學校から歸つて来たので、今迄赤いリボンに占領されてゐた家庭が、急に幾色かの華やかさを加へた。幼稚園へ行く七つになる男の子が、巴の紋の付いた陣太鼓の様なものを持つて来て、宵子さん叩かして上るから御出と連れて行つた。其時千代子は巾着の様な恰好をした赤い毛織の足袋が廊下を動いて行く影を見詰めてゐた。其足袋の紐の先には丸い房が付いてゐて、それが小さな足を運ぶ度にぱつ／＼と飛んだ。

『あの足袋は慥御前が編んで遣つたのだつたね』

「え、可愛らしいわね」

千代子は其處へ坐つて、しばらく叔父と話してゐた。其うちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思ふと、それが見る／＼音を立て、空坊主になつた梧桐をした、か濡らし始めた。松本も千代子も申し合せた様に、硝子越の雨の色を眺めて、手焙に手を翳した。

「芭蕉があるもんだから餘計音がするのね」

「芭蕉は能く持つものだよ。此間から今日は枯れるか、今日は枯れるかと思つて、毎日斯うして見てゐるが中々枯れない。山茶花が散つて、青桐が裸になつても、まだ青いんだからなわ」

「妙な事に感心するのね。だから恒三は閑人だつて云はれるのよ」

「其代り御前の御父さんには芭蕉の研究なんか死ぬ迄出来つこない」

「爲たかないわ、そんな研究なんか。だけど叔父さんは内のお父さんよりか全く學者ね。妾本當に敬服してよ」

「生意氣云ふな」

「あら本當よ貴方。だつて何を聞いても知つてゐるんですもの」

二人が斯んな話をしてゐると只今此方が御見えになりましたと云つて、下女が一通の紹介状の様なものを持つて來て松本に渡した。松本は「千代子待つて御出。今に又面白い事を教へて遣るから」と笑ひながら立ち上つた。

「厭よ又此間見たいに、西洋煙草の名なんか澤山覚えさせちや」

松本は何にも答へずに客間の方へ出て行つた。千代子も茶の間へ取つて返した。其處には雨に降り込められた空の光を補ふため、もう電氣燈が點つてゐた。臺所では既に夕飯の支度を始めたと思へて、瓦斯七輪が二つとも忙しく青い焰を吐いてゐた。やがて子供は大きな食卓に二人づゝ向ひ合せて坐つた。宵子丈は別に下女が付いて食事をするのが例になつてゐるので、此晩は千代子が其役を引受けた。彼女は小さい朱塗の椀と小皿に盛つた魚肉とを盆の上に載せて、横手にある六疊へ宵子連れ込んだ。其處は家のもの、着更

をする爲に多く用ひられる室なので、箆筒が二つと姿見が一つ、壁から飛び出した様に据ゑてあつた。千代子は其姿見の前に玩具の様な椀と茶椀を載せた盆を置いた。

『さあ宵子さん、まんまよ。お待ち遠さま』

千代子が粥を一匙宛掬つて口へ入れて遣る度に、宵子は甘しい〜だの、頂戴々々だの色々な藝を強ひられた。仕舞に自分一人で食べると云つて、千代子の手から匙を受け取つた時、彼女は又丹念に匙の持ち方を教へた。宵子は固より極めて短い單語より外に發音出来なかつた。さう持つのではないと叱られると、屹度御供の様な平たい頭を傾げて、斯う？斯う？と聞き直した。それを千代子が面白がつて、何遍も繰り返さしてゐるうちに、何時もの通り斯う？と半分言ひ懸けて、心持横にした大きな眼で千代子を見上げた時、突然右の手に持つた匙を放り出して、千代子の膝の前に俯伏になつた。

『何うしたの』

千代子は何の氣も付かずに宵子を抱き起した。すると丸で眠つた子を抱へた様に、たゞ手應がぐたりとした丈なので、千代子は急に大きな聲を出して、宵子さん宵子さんと呼んだ。

(四)

宵子はうと〜寝入つた人の様に眼を半分閉ぢて口を半分開けた儘千代子の膝の上に支へられた。千代子は平手で其脊中を二三度叩いたが、何の效目もなかつた。

『叔母さん、大變だから来て下さい』

母は驚いて箸と茶椀を放り出したなり足音を立て、這入つて来た。何うしたのといひながら、電燈の真下で顔を仰向にして見ると、唇にもう薄く紫の色が注してゐた。口へ掌を當てがつても、呼吸の通ふ音はしなかつた。母は

呼吸の塞つた様な苦しい聲を出して、下女に濡手拭を持つて來させた。それを宵子の額に載せた時、「脈はあつて」と千代子に聞いた。千代子はすぐ小さい手頭を握つたが脈は何處にあるか丸で分らなかつた。

「叔母さん何うしたら好いでせう」と蒼い顔をして泣き出した。母は茫然と其處に立つて見てゐる子供に、「早く御父さんと呼んで入らつしやい」と命じた。子供は四人とも客間の方へ馳け出した。其足音が廊下の端で止まつたと思ふと、松本が不思議さうな顔をして出て來た。「何うした」と云ひながら、蔽ひ被さる様に細君と千代子の上から宵子を覗き込んだが、一目見ると急に眉を寄せた。

「醫者は……」

醫者は時を移さず來た。「少し模様が變です」と云つてすぐ注射をした。然し何の效能もなかつた。「駄目でせうか」といふ苦しく張り詰めた問が、固く結ばれた主人の唇を洩れた。さうして絶望を怖れる怪しい光に充ちた三人の

眼が一度に醫者の上に据ゑられた。鏡を出して瞳孔を眺めてゐた醫者は、此時宵子の裾を捲つて肛門を見た。

「是では仕方がありません。瞳孔も肛門も開いて仕舞つてゐますから。何うも御氣の毒です」

醫者は斯う云つたが又一筒の注射を心臓部に試みた。固より夫は何の手段にもならなかつた。松本は透徹る様な娘の肌針の突き刺される時、自から眉間を險しくした。千代子は涙をぼろ／＼膝の上に落した。

「病因は何でせう」

「何うも不思議です。たい不思議といふより外に云ひ様がないやうです。何う考へても……」と醫者は首を傾けた。「辛子湯でも使はして見たら何うですか」と松本は素人料簡で聞いた。「好いでせう」と醫者はすぐ答へたが、其顔には毫も獎勵の色が出なかつた。

やがて熱い湯を盥へ汲んで、湯氣の濛々と立つ真中へ辛子を一袋空けた。

母と千代子は黙つて宵子の着物を取除けた。醫者は熱湯の中へ手を入れて、『もう少し注水ませう。餘り熱いと火傷でもなさると不可ませんから』と注意した。

醫者の手に抱き取られた宵子は、湯の中に五六分浸けられてゐた。三人は息を殺して柔かい皮膚の色を見詰てゐた。『もう好いでせう。餘まり長くなる……』と云ひながら、醫者は宵子を盥から出した。母はすぐ受取つてタオルで鄭寧に拭いて元の着物を着せて遣つたが、ぐたくになつた宵子の様子に、些とも前と變りがないので、『少しの間此儘寐かして置いて遣りませう』と恨めしさらに松本の顔を見た。松本は夫が可からうと答へた儘、又座敷の方へ取つて返して、來客を玄關に送り出した。

小さい蒲團と小さい枕がやがて宵子の爲に戸棚から取り出された。其上に常の夜の安らかな眠りに落ちたと思へない宵子の姿を眺めた千代子は、わつと云つて突伏した。

「叔母さん飛んだ事をしました……」

「何も千代ちやんがした譯ぢやないんだから……」

「でも妾が御飯を喫べさしてゐたんですから……叔父さんにも叔母さんにも洵とに濟みません」

千代子は途切れ／＼の言葉で、先刻自分が夕飯の世話してゐた時の、平生と異らない元氣な様子を、何遍も繰返して聞かした。松本は腕組をして、『何うも矢張り不思議だよ』と云つたが、『おいお仙、此處へ寝かして置のは可哀さうだから、あつちの座敷へ連れて行つてやらう』と細君を促した。千代子も手を貸した。

(五)

手頃な屏風がないので、唯都合の好い位置を擇つて、何の圍ひもない所へ、

そつと北枕に寝かした。今朝方玩弄にしてゐた風船玉を茶の間から持つて来て、お仙が其枕元に置いて遣つた。顔へは白い晒し木綿を掛けた。千代子は時々それを取り除けて見ても泣いた。「一寸貴方」とお仙が松本を顧みて、「丸で観音様の様に可愛い顔をしてゐます」と鼻を詰らせた。松本は「左うか」と云つて、自分の坐つてゐる席から宵子の顔を覗き込んだ。

やがて白木の机の上に、檜と線香立と白團子が並べられて、蠟燭の灯が弱い光を放つた時、三人は始めて眠りから覺めない宵子と自分達が遠く離れて仕舞つたといふ心細い感じに打たれた。彼等は代るゝ線香を上げた。其煙の香が、二時間前とは全く違ふ世界に誘ひ込された彼等の鼻を断えず刺戟した。外の子供は平生の通り早く寐かされた後に、咲子といふ十三になる長女丈が起きて線香の側を離れなかつた。

『御前も御寐よ』

『まだ内幸町からも神田からも誰も來ないのね』

『もう來るだらう。好いから早く御寐』

咲子は立つて廊下へ出たが、其所で振り回つて、千代子を招いた。千代子が同じく立つて廊下へ出ると、小さな聲で、怖いから一所に便所へ行つて呉れると頼んだ。便所には電燈が點けてなかつた。千代子は構子を擦つて雪洞に灯を移して、咲子と一所に廊下を曲つた。歸りに下女部屋を覗いて見ると、飯焚が出入の車夫と火鉢を挟んでひそ／＼何か話してゐた。千代子には夫が宵子の不幸を細かに語つてゐるらしく思はれた。外の下女は茶の間で來客の用意に盆を拭いたり茶碗を並べたりしてゐた。

通知を受けた親類のものが其内二三人寄つた。何れ又來るからと云つて歸つたのもあつた。千代子は來る人毎に宵子の突然な最期を繰返し／＼語つた。十二時過からお仙は通夜をする人の爲に、わざと置火燧を拵へて室に入れたが、誰もあたるものはなかつた。主人夫婦は無理に勧められて寢室へ退いた。其後で千代子は幾度か短くなつた線香の煙を新しく繼いだ。雨はまだ降り已

まなかつた。夕方芭蕉に落ちた響はもう聞こえない代りに、亞鉛葺の廂にわたる音が、非常に淋しくて悲しい点滴を彼女の耳に絶えず送つた。彼女は此雨の中で、時々宵子の顔に當てた晒を取つては啜泣をしてゐるうちに夜が明けた。

其日は女がみんなして宵子の經帷子を縫つた。百代子が新たに内幸町から來たのと、外に懇意の家の細君が二人程見えたので、小さい袖や裾が、方々の手に渡つた。千代子は半紙と筆と硯とを持って廻つて、南無阿彌陀佛といふ六字を誰にも一枚づゝ書かした。『市さんも書いて上げて下さい』と云つて、須永の前へ來た。『何うするんだい』と聞いた須永は、不思議さうに筆と紙を受取つた。

『細かい字で書ける丈一面に書いて下さい。後から六字宛を短冊形に剪つて棺の中へ散らしにして入れるんですから』

皆な畏まつて六字の名號を認めた。咲子は見ちや厭よと云ひながら袖屏風

をして曲くねつた字を書いた。十一になる男の子は僕は假名で書くよと斷つて、ナムアマダブツと電報の様に幾何も並べた。午過になつて愈棺に入れるとき松本は千代子に『御前着物を着換さして御遣りな』と云つた。千代子は泣きながら返事もせず、冷たい宵子を裸にして抱き起した。その脊中には紫色の斑點が一面に出でゐた。着換が済むとお仙が小さい珠數を手にかけてやつた。同じく小さい編笠と藁草履を棺に入れた。昨日の夕方迄穿いてゐた赤い毛糸の足袋も入れた。其紐の先に付けた丸い球のぶら／＼動く姿がすぐ千代子の眼に浮んだ。皆の呉れた玩具も足や頭の所へ押し込んだ。最後に南無阿彌陀佛の短冊を雪の様に振り掛けた上へ蓋をして、白綸子の被をした。

(六)

友引は善くないといふお仙の説で、葬式を一日伸ばしたため、家の中は陰

氣な空気の裡に常よりは賑はつた。七つになる嘉吉といふ男の子が、何時も陣太鼓を叩いて叱られた後、そつと千代子の傍へ来て、宵子さんはもう歸つて来ないのと聞いた。須永が笑ひながら、明日は嘉吉さんも焼場へ持つて行つて、宵子さんと一所に焼いて仕舞ふ積だと調戲ふと、嘉吉はそんな積なにか僕厭だぜと云ひながら、大きな眼をくるく／＼させて須永を見た。咲子は、御母さん妾も明日御葬式に行きたいわとお仙に強請つた。妾もねと九つになる重子が頼んだ。お仙は漸く氣が付いた様に、奥で田口夫婦と話をしてゐた夫を呼んで、『貴方、明日入らして』と聞いた。

『行くよ。お前も行つてやるが好い』

『え、行く事に極めてます。子供には何を着せたら可いでせう』

『紋付で可いちやないか』

『でも餘まり模様が派手だから』

『袴を穿けば可いよ。男の子は海軍服で澤山だし。お前は黒紋付だらう。黒

い帯は持つてるかい』

『持つてます』

『千代子、御前も持つてるなら喪服を着て供に立つて御遣り』

斯んな世話を焼いた後で、松本は又奥へ引返した。千代子も亦線香を上げに立つた。棺の上を見ると、何時の間にか綺麗な花環が載せてあつた。『何時来たの』と傍に居る妹の百代に聞いた。百代は小さな聲で『先刻』と答へたが、『叔母さんが子供のだから、白い花だけでは淋しいつて、わざと赤いのを交ぜましたんですつて』と説明した。姉と妹はしばらく其處に並んで坐つてゐた。十分ばかりすると、千代子は百代の耳に口を付けて、『百代さん貴方宵子さんの死顔を見て』と聞いた。百代は『え、』と首肯づいた。

『何時』

『ほら先刻御棺に入れる時見たんぢやないの。何故』

千代子は夫を忘れてゐた。妹が若し見ないと云つたら、二人で棺の蓋をも

う一遍開けようと思つたのである。「御止しなさいよ、怖いから」と云つて百代は首を掉つた。

晩には通夜僧が来て御經を上げた。千代子が傍で聞いてゐると、松本は坊さんを捕まへて、三部經がどうだの、和讃がどうだのといふ變な話をしてゐた。其會話の中には親鸞上人と蓮如上人といふ名が度々出て來た。十時少し廻つた頃、松本は菓子と御布施を僧の前に並べて、もう宜しいから御引取下さいと斷つた。坊さんの歸つた後でお仙が其の理由を聞くと、「何坊さんも早く寝た方が勝手だよね。宵子だつて御經なんか聴くのは嫌だよ」と濟ましてゐた。千代子と百代子は顔を見合せて微笑した。

あくる日は風のない明かな空の下に、小ひさな棺が靜かに動いた。路端の人はそれを何か不可思議のものであるかの様に目送した。松本は白張の提灯や白木の輿が嫌ひだと云つて、宵子の棺を喪車に入れたのである。其喪車の周圍に垂れた黒い幕が揺れる度に、白繪子の覆をした小さな棺の上に飾つた

花環がちら／＼見えた。其處いらに遊んでゐた子供が駆け寄つて來て、珍らしさうに車の中を覗き込んだ。車と行き逢つた時、脱帽して過ぎた人もあつた。

寺では讀經も焼香も形式通り濟んだ。千代子は廣い本堂に坐つてゐる間、不思議に涙も何も出なかつた。叔父叔母の顔を見ても是といつて憂ひに鎖された様子は見えなかつた。焼香の時、重子が香を撮んで香爐の裏へ燻べるのを間違へて、灰を一撮み取つて、抹香の中へ打ち込んだ折には、可笑しくなつて吹き出した位である。式が果て、から松本と須永と別に一二人棺に附き添つて火葬場へ廻つたので、千代子は外のものとし所に又矢來へ歸つて來た。車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しい位悲しかつた昨日一昨日の気分の方が、清くて美しい物を多量に含んでゐたらしく考へて、其時味はつた痛烈な悲哀を却て戀しく思つた。

骨上にはお仙と須永と千代子と夫に平生宵子の守をしてゐた清といふ下女が附いて都合四人で行つた。相木の停車場を下りると二丁位な所を、つい氣が付かずに宅から車に乗つて出たので時間は却て長く掛つた。火葬場の経験は千代子に取つて生れて始めてあつた。久しく見ずにゐた郊外の景色も忘れ物を思ひ出した様に嬉しかつた。眼に入るものは青い麥島と青い大根島と常磐木の中に赤や黄や褐色を雑多に交ぜた森の色であつた。前へ行く須永は時々後を振り返つて、穴八幡だの諏訪の森だのを千代子に教へた。車が暗いだらゝ坂へ来た時、彼は又小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子の爲に指した。夫には弘法大師千五十年供養塔と刻んであつた。その下に熊笹の生ひ茂つた吹井戸を控へて、一軒の茶見世が橋の袂を左も田舎道らしく見せてゐた。折々坊主になりかけた高い樹の枝の上から、色の變つた小さい葉

が一つづゝ落ちて来た。夫が空中で非常に早くきり／＼舞ふ姿が鮮やかに千代子の眼を刺戟した。夫が容易に地面の上へ落ちずに、何時迄も途中でひらひらするもの、彼女には眼新しい現象であつた。

火葬場は日當りの好い平地に南を受けて建てられてゐるので、車を門内に引き入れた時、思つたより陽氣な影が千代子の胸に射した。お仙が事務所の前で、松本ですがと云ふと、郵便局の受付口見た様な窓の中に坐つてゐた男が、鍵は御持ちでせうねと聞いた。お仙は變な顔をして急に懷や帶の間を探り出した。

「飛んだ事をしたよ。鍵を茶の間の用筆筒の上へ置いたなり……」

「持つて來なかつたの。ぢや困るわね。まだ時間があるから急いで市さんに取つて來て貰ふと好いわ」

二人の問答を後の方で冷淡に聞いてゐた須永は、鍵なら僕が持つて來てゐるよと云つて、冷たい重いものを袂から出して叔母に渡した。お仙が夫を受

付口へ見せてゐる間に、千代子は須永を窘めた。

「市さん、貴方本當に悪らしい方ね。持つてるなら早く出して上げれば可いの。叔母さんは宵子さんの事で、頭が盆槍してゐるから忘れるんぢやありませんか」

須永は唯微笑して立つてゐた。

「貴人の様な不人情な人は斯んな時には一層来ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし」

「不人情なんぢやない。まだ子供を持つた事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」

「まあ。能く叔母さんの前でそんな呑気な事が云へるのね。ぢや妾なんか何うしたの。何時子供持つた覺があつて」

「あるか何うか僕は知らない。けれども千代ちゃんは女だから、大方男より美しい心を持つてるんだらう」

お仙は二人の口論を聞かない人の様に、用事を済ますとすぐ待合所の方へ歩いて行つた。其處へ腰を掛けてから、立つてゐる千代子を手招きした。千代子はすぐ叔母の傍へ来て座に着いた。須永も續いて這入つて来た。さうして二人の向側にある涼み臺見た様なものゝ上に腰を掛けた。清もお掛けと云つて自分の席を割いて遣つた。

四人が茶を呑んで待ち合はしてゐる間に、骨上の連中が二三組見えた。最初は田舎染みたお婆さん丈で、是はお仙と千代子の服装に對して遠慮でもしたらしく口敷を多く利かなかつた。次には尻を絡げた親子連が来た。活潑な聲で、壺を下さいと云つて、一番安いのを十六錢で買つて行つた。三番目には散髪に角帯を締めた男とも女とも片の付かない盲者が、紫の袴を穿いた女の子に手を引かれて遣つて来た。さうして未だ時間はあるだらうねと念を押して、袂から出した巻煙草を吸ひ始めた。須永は此盲者の顔を見ると立ち上つてふいと表へ出たぎり中々返つて来なかつた。所へ事務所のものがお仙

の傍へ来て、用意が出来ましたから何うぞと促したので、千代子は須永を呼びに裏手へ出た。

(八)

眞鍮の掛札に何々殿と書いた並等の籠を、薄氣味悪く左右に見て裏へ抜けると、廣い空地の隅に松薪が山の様に積んであつた。周圍には綺麗な孟宗藪が蒼々と茂つてゐた。其下が麥島で、麥島の向ふが又岡續きに高く蜿蜒してゐるので、北側の眺めは殊に晴々しかつた。須永は此空地の端に立つて廣い眼界をぼんやり見渡してゐた。

『市さん。もう用意が出来たんですつて』

須永は千代子の聲を聞いて黙つた儘歸つて来たが、『あの竹藪は大變見事だね。何だか死人の膏が肥料になつて、あゝ生々延びる様な氣がするぢやない

か。此處に出来る筈は屹度旨いよ』と云つた。千代子は『おゝ厭だ』と云ひつ放しにして、さつさと又並等を通り抜けた。宵子の籠は上等の一號といふので、扉の上に紫の幕が張つてあつた。その前に昨日の花環が少し凋み掛けて、臺の上に静かに横たはつてゐた。夫が昨夜宵子の肉を焼いた熱氣の記念の様に思はれるので、千代子は急に息苦しくなつた。御坊が三人出て来た。其内の一番年を取つたのが『御封印を……』と云ふので、須永は『よし、構はないから開けて呉れ』と頼んだ。畏まつた御坊は自分の手で封印を切つて、かちやりと響く音をさせながら錠を抜いた。黒い鐵の扉が左右へ開くと、薄暗い奥の方に、灰色の丸いものだの、黒いものだの白いものだのが、形を成さない一塊となつて臙氣に見えた。御坊は『今出させよう』と斷つて、レールを二本前の方に繼ぎ足して置いて、鐵の環に似たものを二つ棺臺の端に掛けたかと思ふと、忽然がらくといふ音と共に、かの形を成さない一塊の焼残りが四人の立つてゐる鼻の下へ出て来た。千代子は其なかで、例の御供に

似てふつくらと膨らんだ宵子の頭蓋骨が、生きてゐた時其儘の姿で残つてゐるのを認めて急に手帛を口に銜へた。御坊は此頭蓋骨と頬骨と外に二つ三つの大きな骨を残して、『あとは綺麗に篩つて持つて参りませう』と云つた。四人は各自木箸と竹箸を一本宛持つて臺の上の白骨を思ひ／＼に拾つては、白い壺の中へ入れた。さうして誘ひ合せた様に泣いた。たゞ須永丈は蒼白い顔をして口も利かず鼻も鳴らさなかつた。『齒は別になさいますか』と聞きながら、御坊が小器用に齒を拾ひ分けて呉れた時、顎をくしや／＼と潰して其中から二三枚擇り出したのを見た須永は、『斯うなると丸で人間の様な氣がしないな。砂の中から小石を拾ひ出すと同じ事だ』と獨言の様に云つた。下女が三和土の上にはた／＼と涙を落した。お仙と千代子は箸を置いて手帛を顔へ當てた。

車に乗るとき千代子は杉の箱に入れた白い壺を抱いて夫を膝の上に乗せた。車が駆け出すと冷たい風が膝掛と杉箱の間から吹き込んだ。高い樺が白茶けた幹を路の左右に並べて、彼等を送り迎へる如くに細い枝を揺り動かした。其細い枝が遙か頭の上で交又する程繁く兩側から出てゐるのに、自分の通る所は存外明るいのを奇妙に思つて、千代子は折々頭を上げては、遠い空を眺めた。宅へ着いて遺骨を佛壇の前に置いた時、すぐ寄つて來た子供が、蓋を開けて見せて呉れといふのを彼女は断然拒絶した。

やがて家内中同じ室で晝飯の膳に向つた。『斯うして見ると、まだ子供が澤山ゐるやうだが、是で一人もう缺けたんだね』と須永が云ひ出した。

『生きてゐる内は夫程にも思はないが、逝かれて見ると一番惜しい様だね。此處にゐる連中のうちで誰か代りになれば可いと思ふ位だ』と松本が云つた。

『非道いわね』と重子が咲子に耳語いた。

『叔母さん又奮發して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵へて頂戴。可愛がつて上げるから』

『宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違

つて代りが出来たつて、亡くしたのを忘れる譯にや行かないんだから」
「己は雨の降る日に紹介状を持つて會ひに来る男が厭になつた」

須永の話

(一)

敬太郎は須永の門前で後姿の女を見て以來、此二人を結び付ける縁の糸を常に想像した。其糸には一種夢の様な匂ひがあるので、二人を眼の前に、須永とし又千代子として眺める時には、却て何處かへ消えて仕舞ふ事が多かつた。けれども彼等が普通の人間として敬太郎の肉眼に現實の刺戟を與へない折々には、失はれた糸が又二人の中を離すべからざる因果の如くに繋いだ。田口の家へ出入する様になつてからも、須永と千代子の關係に就いては、一口でさへ誰からも聞いた事はなし、又二人の様子を直に觀察しても尋常の從兄弟以上に何物も仄めいてゐなかつたには違ないが、斯ういふ當初からの聯想に支配されて、彼は頭の何處かに、二人を常に一對の男女として認める傾

きを有つてゐた。女の連添はない若い男や、男の手を組まない若い女は、要するに敬太郎から見れば自然を損なつた片輪に過ぎないので、彼が自分の知る彼等を頭のうちで斯様に組み合はせたのは、まだ片輪の境遇に迷兒付いてゐる二人に、自然が生み付けた通りの資格を早く與へて遣りたいといふ道義心の要求から起つたのかも知れなかつた。

それは小六がかしい理窟だから、假令何んな要求から起らうと敬太郎の爲に辯ずる必要はないが、此頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社會との矛盾に、一寸首を捻つたのは事實に相違なかつた。彼は其話を書生の佐伯から聞いたのである。尤も佐伯の様なもの、まだ事の纏まらない先から、奥の委しい話を知らう筈がなかつた。彼はたゞ漠然とした顔の筋肉を何時もより緊張させて、何でもそんな評判ですと云ふ丈であつた。千代子を貰ふ人の名前も無論分らなかつたが、身分の實業家である事は慥に思はれた。

「千代子さんは須永君の所へ行くのだと許思つてゐたが、左うちやないのかね」

「左うも行かないでせう」

「何故」

「何故つて聞かれると、僕にも明瞭な答は出来悪いんですが、一寸考へて見ても六づかしさうですね」

「左うかね、僕は又丁度好い夫婦だと思つてるがね。親類ぢやあるし、年だつて五つか六つ違なら可笑しかなしさ」

「知らない人から見ると一寸さう見えるでせうがね。裏面には色々複雑な事情もある様ですから」

敬太郎は佐伯の云はゆる「複雑な事情」なるものを根掘り葉掘り聞きたくなつたが、何だか自分を門外漢扱ひにする様な彼の言葉が癪に障ると、高が玄關番の書生から家庭の内幕を聞き出したと云はれては自分の品格に拘は

ると、最後には、口程詳しい事情を佐伯が知つてゐる氣違ひがないので、夫限其話しは已めにした。其折序ながら奥へ行つて細君に挨拶をして少時話したが、別に平生と何の變る様子もないので、御目出たう御庭いますと云ふ勇氣も出なかつた。

是は敬太郎が須永の宅で矢來の叔父さんの家にあつた不幸を千代子から聞いたつゝ二三日前の事であつた。其日彼が久し振に須永を訪問したのも、實は其結婚問題に就て須永の考へを確かめる積であつた。須永が何處の何人と結婚しようとして、千代子が何處の何人に片附かうと、夫は敬太郎の關係する所ではなかつたが、此二人の運命が、夫程容易く右左へ未練なく離れくになり得るものか、又は自分の想像した通り幻に似た絲の様なものか、二人にも見えない縁となつて、彼等を冥々のうちに繋ぎ合せてゐるものか、夫とも此夢で織つた帯とでも形容して然るべき散ら／＼するものが、或時は二人の眼に明らかに見え、或時は全く切れて、彼等をばら／＼に孤立させるものか、

——其處いらが敬太郎には知りたかつたのである。固より夫は單なる物數奇に過ぎなかつた。彼は明らかに左うだと自覺してゐた。けれども須永に對してなら、物數奇を満足させても無禮に當らない事も自覺してゐた。夫許か此物數奇を満足させる権利があると迄信じてゐた。

(二)

其日は生憎千代子に妨げられた上、仕舞には須永の母さへ出て來たので、大分長く坐つてゐたにも拘らず、立ち入つた話は一切持ち出す機會がなかつた。たゞ敬太郎は偶然にも自分の前に並んだ三人が、有の儘の今の姿で、現に似合はしい夫婦と姑に成り終せてゐるといふ事に不圖思ひ及んだ時、彼等を世間並の形式で纏めるのは、最も容易い仕事の様に考へて歸つた。

次の日曜が又幸ひな暖かい日和を凡ての勤め人に恵んだので、敬太郎は朝

早くから須永を尋ねて、郊外に誘なはうとした。無精で我儘な彼は玄關先迄出て来ながら、中々應じさうにしなかつたのを、母親が無理に勸めて漸く靴を穿かした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通り何方へでも動く人であつた。其代りいくら相談を掛けても、ある判切した方角へ是非共足を運ばなければならぬと主張する男ではなかつた。彼と矢來の松本と一所に出ると、二人とも行先を考へずに歩くので、一致して飛んでもない所へ到着する事がまゝ有つた。敬太郎は現に此人の母の口から其例を聞かされたのである。

此日彼等は兩國から汽車に乗つて鴻の臺の下迄行つて降りた。夫から美しい廣い河に沿つて土堤の上をのそ／＼歩いた。敬太郎は久し振に晴々とした好い気分になつて、水だの岡だの帆懸船だのを見廻した。須永も景色丈は賞めたが、まだ斯んな吹き晴らしの土堤などを歩く季節ぢやないと云つて、寒いのに伴れ出した敬太郎を恨んだ。早く歩けば暖くなると主張した敬太郎はさつさと歩き始めた。須永は呆れた様な顔をして跟いて來た。二人は柴又の帝

釋天の傍迄來て、川甚といふ家へ這入つて飯を食つた。其處で眺へた鰻の蒲焼が甘垂るくて食へないと云つて、須永は又苦い顔をした。先刻から二人の気分が熱しないので、しんみりした話しをする餘地が出て來ないのを苦しがつてゐた敬太郎は、此時須永に『江戸ッ子は贅澤なものだね。細君を貰ふとさにも左う贅澤を云ふかね』と聞いた。

『云へれば誰だつて云ふさ。何も江戸ッ子に限りやしない。君見た様な田舎ものだつて云ふだらう』

須永は斯う答へて澄ましてゐた。敬太郎は仕方なしに『江戸ッ子は無愛嬌なものだね』と云つて笑ひ出した。須永も突然可笑しくなつたと見えて笑ひ出した。夫れから後は二人の気分と同じ様に、二人の會話も圓滿に進行した。敬太郎が須永から『君も此頃は大人落ち付いて來た様だ』と評されても、彼は『少し眞面目になつたかね』と大人しく受るし、彼が須永に『君は益偏窟に傾くぢやないか』と調戲つても、須永は『何うも自分ながら厭になる事が

ある』と快よく己れの弱點を承認する丈であつた。
 斯ういふ打ち解けた心持で、二人が差向ひに互の眼の奥を見透して恥づかしがらない時に、千代子の問題が持ち出されたのは、其真相を聞かうとする敬太郎に取つて偶然の仕合せであつた。彼は先づ一週間程前耳にした彼女が近いうちに結婚するといふ噂を皮切に須永を襲つた。其時須永は少しも昂奮した様子を見せなかつた。寧ろ何時もより沈んだ調子で、『又何か縁談が起り掛けてゐるやうだね。今度は旨く纏まれば可いが』と答へたが、急に口調を更へて、『なに君は知らない事だが、今迄もさう云ふ話は何度もあつたんだよ』と左も陳腐らしさうに説明して聞かせた。
 『君は貰ふ氣はないのかい』
 『僕が貰ふ様に見えるかね』
 話しは斯んな風に、御互で引き摺る様にして段々先へ進んだが、愈際どい所迄打ち明けるか、左もなければ題目を更へるより外に仕方がないといふ點

迄押し詰められた時、須永はとうとう敬太郎に『又洋杖を持つて来たんだね』と云つて苦笑した。敬太郎も笑ひながら縁側へ出た。其處から例の洋杖を取つて又這入つて来たが、『此通だ』と蛇の頭を須永に見せた。

(三)

須永の話は敬太郎の豫期したよりも遙に長かつた。――
 僕の父は早く死んだ。僕がまだ親子の情愛を能く解しない子供頃に突然死んで仕舞つた。僕は子がないから、自分の血を分けた温い肉の塊まりに對する情は、今でも比較的薄いかも知れないが、自分を生んで呉れた親を懐かしいと思ふ心は其後大分發達した。今の心を其時分持つてゐたならと考へる事も稀ではない。一言でいふと、當時の僕は父には甚だ冷淡だつたのである。尤も父も決して甘い方ではなかつた。今の僕の胸に映る彼の顔は、骨の高い

血色の勝れない、親しみの薄い、厳格な表情に充ちた肖像に過ぎない。僕は自分の顔を鏡の裡に見るたんびに、それが胸の中に収めた父の容貌と大變似てゐるのを思ひ出しては、不愉快になる。自分が父と同じ厭な印象を、傍の人に與へはしまいかと苦に病んで、其處で氣が引ける許ではない。斯んな陰鬱な眉や額が代表するよりも、まだ増しな温い情愛を、血の中に流してゐる今の自分から推して、あんなに冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙を貯へてゐたのではなからうかと考へると、父の記念として、彼の悪い上皮丈を覚えてゐるのが、子として如何にも情ない心持がするからである。父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、『市藏、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知つてゐるか』と云つた。僕は生れた時から母の厄介になつてゐたのだから、今更改めて父からそれを聞かされるのを妙に思つた。黙つて坐つてゐると、父は骨計になつた顔の筋を無理に動かす様にして、『今の様に腕白ぢや、御母さんも構つて呉れないぞ。もう少し大人しくし

ないと』と云つた。僕は母が今迄構つて呉れたんだから此儘の僕で澤山だといふ氣が十分あつた。それで父の小言を丸で必要のない餘計な事の様に考へて病室を出た。

父が死んだ時母は非常に泣いた。葬式が出る間際になつて、僕は着物を着換へさせられた儘、手持無沙汰だから、一人縁側へ出て、蒼い空を覗き込む様に眺めてゐると、白無垢を着た母が何を思つたか不意に其處へ出て來た。田口や松本を始め、供に立つものはみんな向の方で混雜してゐたので、傍には誰も見えなかつた。母は突然自分の坊主頭へ手を載せて、泣き腫らした眼を自分の上に据ゑた。さうして小さい聲で、『御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通可愛がつて上るから安心なさいよ』と云つた。僕は何とも答へなかつた。涙も落さなかつた。其時は夫で濟んだが、両親に對する僕の記憶を、生長の後に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人の此時の言葉であるといふ感じが其後次第々に強く明かになつて來た。何の意味も付

ける必要のない彼等の言葉に、僕は何故厚い疑惑の裏打をしなければならぬのか、それは僕自身に聞いて見ても丸で説明が付かなかつた。時々母に向つて直に問ひ糺して見たい氣も起つたが、母の顔を見ると急に勇氣が摧けて仕舞ふのが例であつた。さうして心の中の何處かで、それを打ち明けたが最後、親しい母子が離れぬになつて、永久今の睦まじさに戻る機會はないと僕に耳語くものが出て來た。夫でなくとも、母は僕の眞面目な顔を見守つて、そんな事が有つたつけかねと笑ひに紛らしさうなので、さう剣ぐらかされた時の残酷な結果を豫想すると、到底も口へ出された義理ぢやないと思ひ直しては黙つてゐた。

僕は母に對して決して柔順な息子ではなかつた。父の死ぬ前に枕元へ呼び付けられて意見された丈あつて、小さいうちから能く母に逆らつた。大きくなつて、女親だけに猶更優しくして遣りたいといふ分別が出来た後でも、矢つ張り彼女の云ふ通りにはならなかつた。此二三年は殊に心配ばかり掛けて

ゐた。が、幾何勝手を云ひ合つても、母子は生れて以來の母子で、此貴といふ觀念を傷つけられた覺は、重手にしろ淺手にしろ、まだ經驗した試しがないといふ考へから、若し彼の事を云ひ出して、二人共後悔の癍痕を遺さなければ濟まない瘡を受けたなら、夫こそ取返し付かない不幸だと思つてゐた。此畏怖の念は神經質に生れた僕の頭で拵へるのかも知れないとも疑つて見たけれども僕にはそれが現在よりも明かな未來として存在してゐる事が多かつた。だから僕は彼の時の父と母の言葉を、それなり忘れて仕舞ふ事が出来なかつたのを、今でも情なく感ずるのである。

(四)

父と母の間は何れ程圓滿であつたか、僕には分らない。僕はまだ妻を貰つた經驗がないから、さう云ふ事を口にする資格はないかも知れないが、如何

な仲の善い夫婦でも、時々には氣不味い思ひを爲合ふのが人間の常だらうから、彼等だつて永く添つてゐるうちには面白くない汚點を雙方の胸の裏に見出しつゝ、世間も知らず互も口にしなれない不滿を、自分一人苦く味はつて我慢した場合はあつたのだらうと思ふ。尤も父は疝癰の強い割に陰性な男だつたし、母は長唄をうたふ時より外に、大きな聲の出せない性分なので、僕は二人の言ひ争ふ現場を、父の死ぬ迄未だ曾て目撃した事がなかつた。要するに世間から云へば、僕等の宅程靜に整つた家庭は滅多に見當らなかつたのである。あの位他の悪口を露骨にいふ松本の叔父でさへ、今だにさう認めて間違ひないものと信じ切つてゐる。

母は僕に對して死んだ父を語る毎に、世間の夫のうちで、最も完全に近いものゝ様に説明して已まない。是は幾分か僕の腹の底に濁つた儘洗んでゐる父の記憶を清めたい爲の辯護とも思はれる。又は彼女自身の記憶に時間の布巾を掛けて段々光澤を出す積とも見られる。けれども慈愛に充ちた親として

の父を僕に紹介する時には、彼女の態度が全く一變する。平生僕が目當りに見てゐるあの柔和な母が、何うして斯う真面目になれるだらうと驚く位、嚴肅な氣象で僕を打据ゑる事さへあつた。が、夫は僕が中學から高等學校へ移る時分の昔である。今はいくら母に強請つて同じ話しを繰返して貰つても、そんな氣高い氣分には到底もなれない。僕の情操は其頃から學校を卒業する迄の間に、近頃の小説に出る主人公の様に、丸で荒み果てたのだらう。現代の空氣に中毒した自分を咒ひたくなると、僕は時々もう一遍で好いから、母の前であつて云ふ崇高な感じに觸れて見たいといふ望みを起すが、同時に其望みが到底も遂げられない過去の夢であるといふ悲しみも湧いて来る。

母の性格は吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容さへすれば、夫で盡きてゐる。僕から見ると彼女は此二字の爲に生れて此二字の爲に死ぬと云つても差支ない。まことに氣の毒であるが、夫でも母は生活の満足を此一點にのみ集注してゐるのだから、僕さへ充分の孝行が出来れば、是に越した

彼女の喜びはないのである。が、もし其僕が彼女の意に背く事が多かつたら、是程の不幸は又彼女に取つて決してない譯になる。それを思ふと僕は非常に心苦しい事がある。

思ひ出したから此處で一寸云ふが、僕は生れてからの一人息子ではない。子供の時分に妙ちやんといふ妹と毎日遊んだ事を覚えてゐる。其妹は大きな模様のある被布を平生着て、人形の様に髪を切り下げてゐた。さうして僕の手を常に市藏ちやんくんと云つて、兄さんとは決して呼ばなかつた。此妹は父の亡くなる何年前かに實扶的里亞で死んで仕舞つた。其頃は血清注射がまだ發明されない時分だったので、治療も大變に困難だつたのだらう。僕は固より實扶的里亞と云ふ名前さへ知らなかつた。宅へ見舞に來た松本に、御前も實扶的里亞かと調戲はれて、うん左うちやないよ僕軍人だよと答へたのを今だに忘れずにゐる。妹が死んでから當分は六づかしい父の顔が大分優しく見えた。母に向つて、まことに御前には氣の毒な事をしたといつた顔が殊に

穏かだつたので、子供ながら、つい其時の言葉迄小さい胸に刻み付けて置いた。然し母が夫れに對して何う答へたかは全く知らない。いくら思ひ出さうとしても思ひ出せない所をもつて見ると、初から覺えなかつたのだらう。是程鋭敏に父を観察する能力を、子供の時から持つてゐた僕が、母に對する注意に缺けてゐたのも不思議である。人間が自分よりも餘計に他を知りたがる癖のあるものだとするれば、僕の父は母よりも餘程他人らしく僕に見えてゐたのかも分らない。それを逆に云ふと、母は觀察に價しない程僕に親しかつたのである。——兎に角妹は死んだ。それからの僕は父に對しても母に對しても一人息子であつた。父が死んで以後の今の僕は母に對しての一人息子である。

(五)

だから僕は母を出來る丈大事にしなければ濟まない。が、實際は同じ原因

が却つて僕を我儘にしてゐる。僕は去年學校を卒業してから今日迄、まだ就職といふ問題について唯の一日も頭を使つた事がない。出た時の成績は寧ろ好い方であつた。席次を目安に人を探る今の習慣を利用しようと思へば、随分友達を羨ましがらせる位置に坐り込む機會もないではなかつた。現に一度はある方面から人選の依託を受けた某教授に呼ばれて意向を聞かれた記憶さへ有つてゐる。夫だのに僕は動かなくなつた。固より自慢で斯う云ふ話をするのではない。眞底を打明けければ寧ろ自慢の反對で、全く信念の缺乏から來た引込み思案なのだから不愉快である。が、朝から晩迄氣骨を折つて、世の中に持て囃された所で、何處が何うしたんだといふ横着は、無論斷る時から付纏つてゐた。僕は時めくために生れた男ではないと思ふ。法律などを修めないで、植物學か天文學でも遣つたらまだ性に合つた仕事为天から授かるかも知れないと思ふ。僕は世間に對しては甚だ氣の弱い癖に、自分に對しては大變辛抱の好い男だから左う思ふのである。

斯ういふ僕の我儘を我儘なりに通して呉れるものは、云ふ迄もなく父が遣して行つた僅ばかりの財産である。もし此財産がなかつたら、僕は何んな苦しい思ひをしても、法學士の肩書を利用して、世間と戦はなければならぬのだと考へると、僕は死んだ父に對して改めて感謝の念を捧げたくなると同時に、自分の我儘は此財産のためにやつと存在を許されてゐるのだから餘程腰の坐らない淺慕なものに違ないと推斷する。さうして其犠牲にされてゐる母が一層氣の毒になる。

母は昔堅氣の教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるものの第一の務めだといふ様な考へを、何より先に抱いてゐる。然し彼女の家名を揚げるといふのは、名譽の意味か、財産の意味か、權力の意味か、又は徳望の意味か、其處へ行くと全く何の分別もない。たゞ漠然と、一つが頭の上落ちて來れば、凡て其他が後を追つて門前に輻湊する位に思つてゐる。然し僕はさういふ問題に就いて、何事も母に説明して遣る勇氣がない。説明し

て聞かせるには、先づ僕の見識で尤もと認められた家名の揚げ方をした上でないと、僕に其資格が出来ないからである。僕は如何なる意味に於ても家名を揚げ得る男ではない。たゞ汚さない丈の見識を頭に入れて置く許である。さうして其見識は母に見せて喜んで貰へる所か、彼女とは丸で懸け離れた縁のないものなのだから、母も心細いだらう。僕も淋しい。

僕が母に掛ける心配の數あるうちで、第一に擧げなければならぬのは、今話した通りの僕の缺點である。然し此缺點を矯めずに母と不足なく暮して行かれる程、母は僕を愛してゐて呉れるのだから、唯濟まないと思ふ心を失はずに、此儘で押せば押せない事もないが、此我儘よりもつと鋭い失望を母に與へさうなので僕が私かに胸を痛めてゐるのは結婚問題である。結婚問題と云ふより僕と千代子を取り巻く周囲の事情と云つた方が適當かも知れない。夫を説明するには話の順序として先づ千代子の生れない當時に溯る必要がある。其頃の田口は決して今程の福利でも資産家でもなかつた。たゞ將

來見込のある男だからと云ふので、父が母の妹に當るあの叔母を嫁に遣るやうに周旋したのである。田口は固より僕の父を先輩として仰いでゐた。何彼につけて相談もしたり、世話にもなつた。兩家の間に新しく成立した此親しい關係が、月と共に加速度を以て圓滿に進行しつゝある際に千代子が生れた。其時僕の母は何う思つたものか、大きくなつたら此子を市藏の嫁に呉れまいかと田口夫婦に頼んだのださうである。母の語る所によると、彼等は其折快よく母の頼みを承諾したのだと云ふ。固より後から百代が生れる、吾一といふ男の子も出来る、千代子を遣らうとすれば何處へでも遣られるのだが、乾度僕に遣らなければならぬ程確に母に受合つたか何うか、其處は僕も知らない。

(六)

鬼に角僕と千代子の間には兩方其物心の付かない當時から既に斯いふ絆があつた。けれども其絆は僕等二人を結び付ける上に於て頗る怪しい絆であつた。二人は固より天に上る雲雀の如く自由に生長した。絆を縛つた人でさへ確と其端を握つてゐる氣ではなかつたのだらう。僕は怪しい絆といふ文字を奇縁といふ意味で此處に使ふ事の出来ないのを深く母の爲に悲しむのである。母は僕の高等學校に這入つた時分夫となく千代子の事を仄めかした。其頃の僕に色氣のあつたのは無論である。けれども未來の妻といふ觀念は丸で頭に無かつた。そんな話に取り合ふ落ち付さへ持つてゐなかつた。殊に子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆ど同じ家に生長したと違はない親しみのある少女は、餘り自分に近過ぎるためか甚だ平凡に見えて、異性に對する普通の刺戟を興へるに足りなかつた。是は僕の方ばかりではあるまい、千代子も恐らく同感だらうと思ふ。其證據には長い實際の前後を通じて、僕は未だ曾て男として彼女から取り扱はれた經驗を記憶する事が出来ない。彼女

から見た僕は、怒らうが泣かうが、科をしようが色眼を使はうが、常に變らない従兄に過ぎないのである。尤も是は幾分か、純粹な氣象を受けて生れた彼女の性情からも出るので、其處になると又僕程彼女を知り抜いてゐるものはないのだが、單に夫丈であつた男女の牆壁が取り除けられる譯のものではあるまい。たゞ一度……然し是は後で話す方が宜からうと思ふ。母は自分のいふ事に耳を借さなかつた僕を羞恥家と解釋して、再び時機を待つものゝ如くに、此問題を懷に收めた。羞恥は僕と雖も否定する勇氣がない。然し千代子に意があるから羞恥んだのだと取つた母は、全くの反對を事實と認めたと同じ事である。要するに母は未來に對する準備といふ考へから、僕等二人を成る可く仲善く育て上げようゝと力めた結果、男女としての二人を次第に遠ざからした。さうして自分では知らずにゐた。夫を知らなければならぬ様にした僕は全く残酷であつた。其日の事を語るのが僕には實際の苦痛である。母は高等學校時代に句はし

た千代子の問題を、僕が大學の二回になる迄、凝と懐に抱いた儘一人で温めてゐたと見えて、ある晩——春休みの頃の花の咲いたといふ噂のあつた或日の晩——そつと僕の前に出でて見せた。其時は僕も大分大人らしくなつてゐたので、静かに其問題を取上げて、裏表から鄭重に吟味する餘裕が出来てゐた。母も其時にはたゞ遠くから句はせる丈でなくて、自分の希望に正當の形式を與へる事を忘れなかつた。僕は何心なく従妹は血屬だから厭だと答へた。母は千代子の生れた時呉れろと頼んで置いたのだから貰つたら可いだらうと云つて僕を驚かした。何故そんな事を頼んだのかと聞くと、何故でも私の好きな子で、御前も嫌ふ筈がないからだ、赤ん坊には應用の利かない様な挨拶をして僕を弱らせた。段々其處を押して見ると、仕舞に涙ぐんで、實は御前の爲ではない、全く私の爲に頼むのだと云ふ。しかも何うして夫が母の爲になるのか、其理由は幾何聞いても語らない。最後に何でも蚊でも千代子は厭かと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答へた。然し當人も僕の所へ来る

氣はなし、田口の叔父も叔母も僕に呉れたくはないのだから、そんな事を申し込むのは止した方が好い、先方で迷惑する丈だからと教へた。母は約束だから迷惑しても構はない、又迷惑する筈がないと主張して、昔田口が父の世話になつたり厄介になつたりした例を數へ擧げた。僕は已を得ないから此問題は卒業する迄解決を着けずに置かうと云ひ出した。母は不安の裏に一縷の望みを現した顔色をして、もう一遍篤と考へて見て呉れと頼んだ。斯ういふ事情で、今迄母一人で懐に抱いてゐた問題を、其後は僕も抱かなければならなくなつた。田口は又田口流に、同じ問題を解しつゝあるのではなからうか。假令千代子を外へ縁付けるにしても、いざと云ふ場合には一應此方の承諾を得る必要があるとすれば、叔父も氣掛りに違ひない。

(七)

僕は不安になつた。母の顔を見る度に、彼女を欺いて其日々々を姑息に送つてゐる様な気がして濟まなかつた。一頃は思ひ直して出來得るならば母の希望通り千代子を貰つて遣りたいとも考へた。僕は其爲にわざ／＼用もない田口の家へ遊びに行つて夫となく叔父や叔母の様子を見た。彼等は僕の母の肉薄に應ずる準備として前以て僕を疎んずる様な素振を口にも舉動にも決して示さなかつた。彼等は夫程淺薄な又不親切な人間ではなかつたのである。けれども彼等の娘の未來の夫として、僕が彼等の眼に如何に憐れむべく映じてゐたかは、遠き前から僕の見抜いてゐた所と、ちつとも變化を來さないばかりか、近頃になつて益々其傾きが著るしくなる様に思はれた。彼等は第一に僕の弱々しい體格と僕の蒼白い顔色とを婿として肯がはない積りしかつた。尤も僕は神經の鋭く動く性質だから、物を誇大に考へ過ぎたり、要らぬ僻み而起して見たりする弊がよくあるので、自分の胸に收めた委しい叔父叔母の觀察を遠慮なく此處に述べる非禮は憚かりたい。たゞ一言で云ふと、彼等

は其當時千代子を僕の嫁にしようと言明したのだらう。少くとも遣つても可い位には考へてゐたのだらう。が、其後彼等の社會に占め得た地位と、彼等とは脊中合せに進んで行く僕の性格が、二重に實行の便宜を奪つて、たゞ惚けかゝつた空しい義理の拔殻を、彼等の頭の何處かに置き去りにして行つたと思へば差支ないのである。

僕と彼等とはあらゆる人の結婚問題に就ても多くを語る機會を持たなかつた。たゞある時叔母と僕との間に斯んな會話が取り換された。

「市さんも最う徐々奥さんを探さなくつちやなりませんね。姉さんは疾うから心配してゐるやうですよ」

「好いのがあつたら母に知らして遣つて下さい」

「市さんには大人しくつて優しい、親切な看護婦見た様な女が可いでせう」

「看護婦見た様な嫁はないかつて探しても、誰も來手はあるまいな」

僕が苦笑しながら、自ら嘲ける如く斯う云つた時、今迄向ふの隅で何かし

てゐた千代子が、不意に首を上げた。

「妾行つて上げませうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども両方共其處に意味のある何物をも認めなかつた。叔母は千代子の方を振り向きもしなかつた。さうして、「御前の様な露骨のから〜した者が何で市さんの氣に入るものかね」と云つた。僕は低い叔母の聲のうちに、窘める様な又怖れる様な一種の響を聞いた。千代子は唯から〜と面白さうに笑つた丈であつた。其時百代子も傍に居た。是は姉の言葉を聞いて微笑しながら席を立つた。形式を具へない斷りを云はれたと解釋した僕はしばらくして又席を立つた。

此事件後僕は同じ問題に關して母の満足を買ふための努力を益々屑よしとしなくなつた。自尊心の強い父の子として、僕の神經は斯ういふ點に於て自分でも驚く位過敏なのである。勿論僕は其折の叔母に對して決して感情を害しはしなかつた。此方からまだ正式の申し込みを受けてゐない叔母としては、

あゝより外に意向の洩らし方も無かつたのだらうと思ふ。千代子に至つては何を云はうが笑はうが、何時でも嬌まりのない彼女の胸の中を、其儘外に表はしたに過ぎないと考へてゐた。僕は其時の千代子の言葉や様子から察して、彼女が僕の所へ來たがつてゐない事丈は、従前通り儘に認めたが、同時に、もし差し向ひで僕の母にしんみり話し込まれでもしたら、えゝさういふ譯なら御嫁に來て上ませうと、其場ですぐ承知しないとも限るまいと思つて、ひそかに掛念を抱いた位である。彼女はさう云ふ時に、平氣で自分の利害や親の意思を犠牲に供し得る極めて純粹の女だと僕は常から信じてゐたからである。

(八)

意地の強い僕は母を嬉しがらせるよりも成可く自我を傷けない様にと祈つ

た。其結果千代子が僕の知らない間に、母から説き落されてはと掛念して、暗に夫を防ぐ分別をした。母は彼女の生れ落ちた當初既に僕の嫁と極めた丈あつて、多くある姪や甥の中で、取り分け千代子を可愛がつた。千代子も子供の時分から僕の家を生家の如く心得て遠慮なく寝泊りに来た。其縁故で、田口と僕の家が昔に比べると比較的疎くなつた今日でも、千代子丈は叔母さん叔母さんと云つて、生の親にでも逢ひに来る様な朗らかな顔をして、しげしげ出入りをして居た。單純な彼女は、自分の身を的に時々起る縁談をさへ、隠す所なく母に打ち明けた。人の好い母は又夫を素直に聞いて遣る丈で、恨めしい眼付一つも見せ得なかつた。僕の恐れる懇談は、斯ういふ關係の深い二人の間に、何時起らないとも限らなかつたのである。僕の分別といふのは先此點に關して、當分母の口を塞いで置かうとする用心に過ぎなかつた。所がいざ改まつて母にそれを切り出さうとすると、唯自分の我を通す爲に、弱い親の自由を奪ふのは殘酷な子に違ないといふ心持が、

何處にか崩すので、つい夫なりにして已める事が多かつた。尤も年寄の眉を曇らすのがたゞ情ない許で已めたとも云はれない。是程親しい間柄でさへ今迄思ひ切つた所を千代子に打ち明け得なかつた母の事だから、假令此儘にして置いても、まあ當分は大丈夫だらうといふ考へが、母に對する僕を多少抑へたのである。

夫で僕は千代子に關して何といふ明瞭な處置も取らずに過ぎた。尤も斯ういふ不安な状態で日を送つた時期にも、丸で田口の家と打絶えた譯ではなかつたので會には單に母の喜ぶ顔を見るだけの目的をもつて内幸町迄電車を利用した覺えさへあつたのである。さういふ或日の晩僕は久し振りに千代子から、習ひ立ての珍らしい手料理を御馳走するからと引止められて、夕飯の膳に就いた。何時も留守勝な叔父が其日は丁度内に居て、食事申例の氣作な話をし續けにしたため、若い人の陽氣な笑ひ聲が障子に響く位家の中が賑つた。飯が濟んだ後で、叔父は何ういふ考へか、突然僕に『市さん久し振に一局や

らうか」と云ひ出した。僕は左程氣が進まなかつたけれども折角だから遣りませうと答へて、叔父と共に別室へ退いた。二人は其處で二三番打つた。固より下手と下手の勝負なので、時間の掛る筈もなく、碁石を片付けても未だ夫程遅くはならなかつた。二人は烟草を呑みながら又話を始めた。其時僕は適當な機會を利用してわざと叔父に『千代子さんの縁談はまだ纏まりませんか』と聞いた。それは固より僕が千代子に對して他意のないといふ事を示すためであつた。が又一方では、一日も早く此問題の解決が着けば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考へたからである。すると叔父は流石に男だけあつて、何の躊躇もなく斯う云つた。――

『いや未だ中々左う行きさうもない。段々そんな話を持つて來て呉れるものがあるが、何しろ六づかしくつて弱る。其上調べれば調べる程面倒になる丈だし、まあ大抵の所で纏まるなら纏めて仕舞はうかと思つてる。――縁談なんでもものは妙なものでね。今だから御前に話すか、實は千代子の生れたとき、

御前の御母さんが、是を市藏の嫁に欲しいいつてね――生れ立ての赤ん坊をだよ』

叔父は此時笑ひながら僕の顔を見た。

『母は本氣で左う云つたんださうです』

『本氣さ。姉さんは又正直な人だからね。實に好い人だ。今でも時々眞面目

になつて叔母さんに其話をするさうだ』

叔父は再び大きな聲を出して笑つた。僕は果して叔父が斯う軽く此事件を解釋して居るなら、母の爲に少し辯じて遣らうかと考へた。が、もし是が世慣れた人の巧妙な覺らせ振だとすれば一口でも云ふ丈が愚だと思ひ直して黙つた。叔父は親切な人で又世慣れた人である。彼の此時の言葉は何方の眼で見ても可いのか、僕には今以て解らない。たゞ僕が其時以來千代子を貰はない方へ愈傾いたのは事實である。

夫から二ヶ月許の間僕は田口の家へ近寄らなかつた。母さへ心配しなければ、夫限内幸町へは足を向けずに済ましたかも知れなかつた。たとひ母が心配するにしても、單に彼女に對する懸念丈が問題なら、或は僕の氣隨をいさといふ極點迄押し通したかも知れなかつた。僕はそんな風に生み付けられた男なのである。所が二ヶ月の末になつて、僕は突然自分の片意地を顧がへさなければ不利だといふ事に氣が付いた。實を云ふと、僕が田口と疎遠になればなる程、母はあらゆる機會を求めて、益千代子と接觸する様に力め出したのである。さうして何時なんどき僕の最も恐れる直接の談判を、千代子に向つて開かないとも限らない様に、漸々形勢を切迫させて來たのである。僕は思ひ切つて、此危機を一帳場先へ繰越さうとした。さうして其決心と共に又田口の敷居を跨ぎ出した。

彼等の僕を遇する態度に固より變りはなかつた。僕の彼等に對する様子も亦二ヶ月前の通りであつた。僕と彼等とは故の如く笑つたり、巫山戯たり、揚足の取りつ競をしたりした。要するに僕の田口で費した時間は、騒がしい位陽氣であつた。本當の所をいふと、僕には少し陽氣過ぎたのである。従つて腹の中が常に空虚な努力に疲れてゐた。鋭い眼で注意したら、何處かに偽の影が射して、本來の自分を醜く彩つてゐたらうと思ふ。其内で自分の氣分と自分の言葉が、半紙の裏表の様になり合つた愉快を感じた覺が唯一遍ある。夫は家例として年に一度か二度田口の家族が揃つて遊びに出る日の出來事であつた。僕は知らずに奥へ通つて、千代子一人が閑靜に坐つてゐるのを見て驚いた。彼女は風邪を引いたと見えて、咽喉に濕布をして居た。常にも似ない蒼い顔色も淋しく思はれた。微笑しながら、「今日は妾御留守居よ」と云つた時、僕は始めて皆出拂つた事に氣が付いた。其日の彼女は病氣の所爲か何時もよりしんみり落付いてゐた。僕の顔さへ

見ると、屹度冷かし文句を並べて、何うしても悪口の云ひ合を挑まなければ已まない彼女が、一人ぼつちで妙に沈んでゐる姿を見たとき、僕は不圖可憐な心を起した。夫で席に着くや否や、優しい慰藉の言葉を口から出す氣もななく自から出した。すると千代子は一種變な表情をして、「貴方今日は大變優しいわね。奥さんを貰つたら左ういふ風に優しく仕て上げなくつちや不可ないわね」と云つた。遠慮がなくて親しみ丈持つてゐた僕は、今迄千代子に對していくら無愛嬌に振舞つても差支ないものと暗に自ら許してゐたのだといふ事に此時始めて氣が付いた。さうして千代子の眼の中に何處か嬉しさうな色の微かながら漂ふのを認めて、自分が悪かつたと後悔した。

二人は殆んど一所に生長したと同じ様な自分達の過去を振り返つた。昔の記憶を語る言葉が互の唇から當時を蘇生らせる便りとして洩れた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遙に勝れて、細かい所迄鮮やかに行き渡つてゐるのに驚いた。彼女は今から四年前、僕が玄關に立つた襦袢の綻を彼女に縫はせた

事迄覚えてゐた。其時彼女の使つたのは木綿糸でなくて絹糸であつた事も知つてゐた。

『妾貴方の描いて呉れた畫をまだ持つてゝ』

成程左う云はれて見ると、千代子に畫を描いて遣つた覺があつた。けれど夫は彼女が十二三の時の事で、自分が田口に買つて貰つた繪具と紙を僕の前へ押付けて無理矢理に描かせたものである。僕の畫道に於ける嗜好は、夫から以後今日に至る迄、ついぞ畫筆を握つた試しがないのでも分るのだから、赤や緑の單純な刺戟が、一通り彼女の眼に映つて仕舞へば、興味は其處に盡きなければならぬ筈のものであつた。夫を保存してゐると聞いた僕は迷惑さうに苦笑せざるを得なかつた。

『見せて上げませうか』

僕は見ないでも可いと斷つた。彼女は構はず立上つて、自分の室から僕の畫を納めた手文庫を持つて來た。

(十)

千代子は其中から僕の描いた畫を五六枚、出して見せた。それは赤い梅だの、紫の東菊だの、色變りのダリヤだの、何れも單純な花卉の寫生に過ぎなかつたが、要らない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭はずに、細かく綺麗に塗り上げた手際は、今の僕から見ると殆んど驚くべきものであつた。僕は是程綿密であつた自分の昔に感服した。

「貴方それを描いて下すつた時分は、今より餘程親切だつたわね」

千代子は突然斯う云つた。僕には其意味が丸で分らなかつた。畫から眼を上げて、彼女の顔を見ると、彼女も黒い大きな瞳を僕の上に凝と据ゑてゐた。僕は何ういふ譯でそんな事を云ふのかと尋ねた。彼女はそれでも答へずに僕の顔を見詰てゐた。やがて何時もより小さな聲で『でも近頃頼んだつて、そ

んなに精出して描いては下さらないでせう』と云つた。僕は描くとも描かないとも答へられなかつた。たゞ腹の中で、彼女の言葉を尤もだと首肯つた。

「夫でも能く斯んな物を丹念に仕舞つて置くね」

「妾御嫁に行く時も持つてく積よ」

僕は此言葉を聞いて變に悲しくなつた。さうして其悲しい氣分が、すぐ千代子の胸に應へさうなのが猶恐ろしかつた。僕は其刹那既に涙の溢れさうな黒い大きな眼を自分の前に想像したのである。

「そんな下らないものは持つて行かないが可いよ」

「可いわ、持つて行つたつて。妾のだから」

彼女は斯う云ひつゝ、赤い梅や紫の東菊を重ねて、又文庫の中へ仕舞つた。僕は自分の氣分を變へるためわざと彼女に何時頃嫁に行く積かと聞いた。彼女はもう直に行くのだと答へた。

「然しまだ極つた譯ぢやないんだらう」

「いゝえ、もう極つたの」

彼女は明かに答へた。今迄自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談が纏まれば好いと念じてゐた僕の心臓は、此の答と共にどきんと音のする浪を打つた。そうして毛穴から這ひ出す様な膏汗が、背中と腋の下を不意に襲つた。千代子は文庫を抱いて立ち上つた。障子を開けると、上から僕を見下して、「嘘よ」と一口判切云ひ切つた儘、自分の室の方へ出て行つた。

僕は動く考へもなく故の席に坐つてゐた。僕の胸には忌々しい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行く行かないが、僕に何う影響するかを、此時始めて實際に自覚する事の出来た僕は、それを自覚させて呉れた彼女の翻弄に對して感謝した。僕は今迄氣が付かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた。或は彼女が氣が付かないうちに僕を愛してゐたのかも知れなかつた。——僕は自分といふ正體が、夫程解り悪い怖いものなのだらうかと考へて、しばらく

茫然としてゐた。すると彼方の方で電話がちりんと鳴つた。千代子が縁傳ひに急ぎ足で遣つて来て、僕に一所に電話を掛けて呉れと頼んだ。僕には一所に掛けるといふ意味が呑み込めなかつたが、すぐ立つて彼女と共に電話口へ行つた。

『もう呼び出してゐるのよ。妾聲が嘎れて、咽喉が痛くつて話が出来ないから貴方代理をして頂戴。聞く方は妾が聞くから』

僕は相手の名前も分らない、又向ふの話の通じない電話を掛るべく、前屈みになつて用意をした。千代子は既に受話器を耳に宛てゝゐた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、獨り彼女が占有する丈なので、僕はたゞ彼女の小声でいふ挨拶を大きくして譯も解らず先方へ取次ぐに過ぎなかつた。夫でも始の内は滑稽も構はず暇が掛るのも厭はず平氣で遣つてゐたが、次第に僕の好奇心を挑發する様な返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲んだ儘、おら一寸それを御貸と聲を掛けて左手を真直に千代子の方へ差し

伸べた。千代子は笑ひながら否々をして見せた。僕は更に姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪はうとした。彼女は決して夫を離さなかつた。取らうとする取らせまいとする争ひが二人の間に起つた時、彼女は手早く電話を切つた。さうして大きな聲を揚げて笑ひ出した。……

(十一)

斯ういふ光景が若し今より一年前に起つたなら僕は其後何遍も繰返し繰返し思つた。さう思ふ度に、もう運過ぎる、時機は既に去つたと運命から宣告される様な気がした。今からでも斯ういふ光景を二度三度と重ねる機會は捉まへられるではないかと、同じ運命が暗に僕を唆かす日もあつた。成程二人の情愛を互に反射させ合ふ爲にのみ眼の光を使ふ手段を憚らなかつたなら、千代子と僕とは其日を基點として出立しても、今頃は人間の利害で割く

事の出来ない愛に陥つてゐたかも知れない。たゞ僕はそれと反對の方針を取つたのである。

田口夫婦の意向や僕の母の希望は、他人の入智慧同様に意味の少ないものとして、單に彼女と僕を裸にした生れ付丈を比較すると、僕等は到底も一所になる見込のないものと僕は平生から信じてゐた。是は何故と聞かれても満足に行く様に答辯が出来ないかも知れない。僕は人に説明する爲にさう信じてゐるのでないから。僕はかつて文學好のある友達からダモンチオと一少女の話を聞いた事がある。ダモンチオといふのは今の伊太利で一番有名な小説家ださうだから、僕の友達の主意は無論彼の勢力を僕に紹介する積だつたのだらうが、僕には其處へ引合に出された少女の方が彼よりも遙に興味が多かつた。其話は斯うである。――

ある時ダモンチオが招待を受けてある會合の席へ出た。文學者を國家の裝飾の様にして曝す西洋の事だから、ダモンチオは其席に群がる凡ての人から

多大の尊敬と愛嬌を以て偉人の如く取扱はれた。彼が満堂の注意を一身に集めて、衆人の間を彼處此處徘徊してゐるうち、何ういふ機會か自分の手巾を足の下へ落した。混雑の際と見えて、彼は固より、傍のものも一向それに氣が付かずにおた。すると未だ年の若い美しい女が一人其手巾を床の上から取り上げて、ダモンチオの前へ持つて來た。彼女はそれをダモンチオに渡す積りで、是は貴方のでせうと聞いた。ダモンチオは有難うと答へたが、女の美しい器量に對して一寸愛嬌が必要になつたと見えて、「貴方にして持つて居らつしやい、進上しますから」と恰も少女の喜びを豫想した様な事を云つた。女は一口の答もせず黙つて其手巾を指先で撮んだ儘暖爐の傍迄行つていきなり夫を火の中に投げ込んだ。ダモンチオは別にして其他の席に居合せたものは悉く微笑を洩らした。

僕は此語を聞いた時、年の若い茶褐色の髪毛を有つた伊太利生れの美人を思ひ浮べるよりも、其代りとしてすぐ千代子の眼と眉を想像した。さうして夫が若し千代子でなくつて妹の百代子であつたなら、たとひ腹の中は何うあらうとも、其場は禮を云つて快よく手巾を貰ひ受けたに違あるまいと思つた。たゞ千代子には夫が出來ないのである。

口の悪い松本の叔父は此姉妹に渾名を付けて常に大蝦蟆と小蝦蟆と呼んでゐる。二人の口が唇の薄い割に長過ぎる所が銀貨入れの墓口だと云つては常に二人を笑はせたり怒らせたりする。是は性質に關係のない顔形の話であるが、同じ叔父が口癖の様に此姉妹を評して、小墓は大人しくつて好いが、大墓は少し猛烈過ぎると云ふのを聞く度に、僕はあの叔父が何う千代子を觀察してゐるのだらうと考へて、必ず彼の眼識に疑ひを挟さみたくなる。千代子の言語なり舉動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に藏してゐるからではなくつて、餘り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるからだと思は固く信じて疑はないのである。彼女の有つてゐる善悪是非の分別は殆ど學問や經驗と獨立してゐる。たゞ直覺的に相手

を目當に燃え出す丈である。夫だから相手は時によると稻妻に打たれた様な思ひをする。當りの強く烈しく来るのは、彼女の胸から純粹な塊まりが一度に多量に飛んで出るといふ意味で、刺だの毒だの腐蝕劑だのを吹き掛けたり浴せ掛けたりするのは丸で譯が違ふ。其證據にはたとひ何れ程烈しく怒られても、僕は彼女から清いもので自分の腸を洗はれた様な氣持のした場合が今迄に何遍もあつた。氣高いものに出會つたといふ感じさへ稀には起した位である。僕は天下の前にたゞ一人立つて、彼女はあらゆる女のうちに尤も女らしい女だと辯護したい位に思つてゐる。

(十二)

是程好く思つてゐる千代子を妻として何處が不都合なのか。——實は僕も自分で自分の胸に斯う聞いた事がある。其時理由も何もまだ考へない先に、僕

はまづ恐ろしくなつた。さうして夫婦としての二人を長く眼前に相像するに堪へなかつた。斯んな事を母に云つたら定めし驚くだらう、同年輩の友達に話しても或は通じないかも知れない。けれども強て沈黙のなかに、記憶を埋める必要もないから、これを自分丈の感想に止めないで此處に自白するが、一口に云ふと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。さうして僕は恐ろしい事丈知つた男なのである。だから唯釣り合はない許でなく、夫婦となれば正に逆に出來上るより外に仕方がないのである。

僕は常に考へてゐる。「純粹な感情程美しいものはない。美しいもの程強いものはない」と。強いものが恐れないのは當り前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪へられないだらう。其光は必ずしも怒を示すとは限らない。情の光でも、愛の光でも、若くは渴仰の光でも同じ事である。僕は屹度其光の爲に射竦められるに極つてゐる。それと同程度或はより以上の輝くものを、返禮として彼女に與へるには、感情家と

して僕が餘りに貧弱だからである。僕は芳烈な一樽の清酒を貰つても、それを味はひ盡す資格を持たない下戸として、今日迄世間から教育されて來たのである。

千代子が僕の所へ嫁に來れば必ず殘酷な失望を経験しなければならぬ。彼女は美しい天賦の感情を、有るに任せて惜氣もなく夫の上注ぎ込ひ代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から豫期するに違ない。年の行かない、學問の乏しい、見識の狭い點から見ると氣の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を擧げて實世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出来る權力か財力を攫まなくつては男子でないかと考へてゐる。單純な彼女は、たとひ僕の所へ嫁に來ても、矢張さう云ふ働き振を僕から要求し、又要求さへすれば僕に出来るものとのみ思ひ詰めてゐる。二人の間に横たはる根本的の不幸は此處に存在すると云つても差支ないのである。僕は今云つた通り、妻としての彼女の美しい

感情を、さう多量に受け入れる事の出来ない、至つて煙ふつた性質なのだ、よし焼石に水を濺いだ時の様に、それを悉く吸ひ込んだ所で、彼女の望み通りに利用する譯には到底も行かない。もし純粹な彼女の影響が僕の何處かに表はれるとすれば、それは幾何説明しても彼女には全く分らない所に、思ひも寄らぬ形となつて發現する丈である。萬一彼女の眼に留まつても、彼女はそれをコスメチックで塗り堅めた僕の頭や羽二重の足袋で包んだ僕の足よりも有難がらないだらう。要するに彼女から云へば、美くしいものを僕の上に永久浪費して、次第々々に結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。

僕は自分と千代子と比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。仕舞にはそれが自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小説に其儘出てゐる様な氣を起す。此間講釋好きの松本の叔父から、詩と哲學の區別を聞かされて以來は、恐れない女と恐れる男といふと、忽ち自分に縁の遠い詩と哲學を想ひ出す。叔父は素人學問ながら斯んな方面に興味を

有つてゐる丈に、面白い事を色々話して聞かしたが、僕を捕まへて「御前の様な感情家は」と暗に詩人らしく僕を評したのは間違つてゐる。僕に云はせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思ひ切つた事の出来ずに恐ろしくしてゐるのは、何より先に結果を考へて取越苦勞をするからである。千代子が風の如く自由に振舞ふのは、先の見えぬ程強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を輕蔑するのである。僕は又感情といふ自分の重みで蹴爪付きさうな彼女を運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐むのである。否時によると彼女の爲に戦慄するのである。

(十三)

須永の話の末段は少し敬太郎の理解力を苦しめた。事實を云へば彼は又彼

なりに詩人とも哲學者とも云ひ得る男なのかも知れなかつた。然し夫は傍から彼を見た眼の評する言葉で、敬太郎自身は決して何方とも思つてゐなかつた。従つて詩とか哲學とかいふ文字も、月の世界でなければ役に立たない夢の様なものとして、殆ど一顧に値しない位に見限つてゐた。其上彼は理窟が大嫌ひであつた。右か左へ自分の身體を動かして得ない唯の理窟は、いくら旨く出来ても彼には用のない賸造紙幣と同じ物であつた。従つて恐れる男とか恐れない女とかいふ辻占に似た文句を、黙つて聞いてゐる筈はなかつたのだが、しつとりと潤つた身の上話の續きとして、感想が其處へ流れ込んで来たものだから、敬太郎も能く解らないながら素直に耳を傾けなければ濟まなかつたのである。

須永も其處に氣が付いた。

「話が理窟張つて六づかしくなつて来たね。あんまり一人で調子に乗つて鏡舌つてゐるものだから」

『いや構はん。大變面白う』

『洋杖の効果がありやしないか』

『何うも不思議にあるやうだ。序にもう少し先迄話す事にしやうぢやないか』

『もう無いよ』

須永はさう云ひ切つて、静かな水の上に眼を移した。敬太郎も少時黙つてゐた。不思議にも今聞かされた須永の詩だか哲學だか分らないものが、形の判然しない雲の峯の様に、頭の中に聳えて容易に消えさうにしなかつた。何事も語らないで彼の前に坐つてゐる須永自身も、平生の紋切形を離れた怪しい一種の人物として彼の眼に映じた。何うしてもまだ話の續があるに違ないと思つた敬太郎は今の一番仕舞の物語は何時頃の事かと須永に尋ねた。それは自分の三回生位の時の出来事だと須永は答へた。敬太郎は同じ關係が過去一年餘りの間に何ういふ徑路を取つて何う進んで、今は何んな解決が付いてるかと思ひ返へした。須永は苦笑して先づ外へ出てからにしようと思つた。

二人は勘定を済まして外へ出た。須永は先へ立つ敬太郎の得意に振り動かす洋杖の影を見て又苦笑した。

柴又の帝釋天の境内に來た時、彼等は平凡な堂宇を、義理に拜ませられたやうな顔をしてすぐ門を出た。さうして二人共汽車を利用してすぐ東京へ歸らうといふ氣を起した。停車場へ來ると、間意るこい田舎汽車の發車時間にまだ大分間があるので二人はすぐ其處にある茶店に入つて休息した。次の物語は其時敬太郎が前約を楯に須永から聞かして貰つたものである。――

僕が大學の三回から四回に移る夏休みの出来事であつた。宅の二階に籠つて此暑中を何う暮したら宜からうと思案してゐると、母が下から上つて來て、閑になつたら鎌倉へ一寸行つて來たら何うだと云つた。鎌倉には其一週間程前から田口のものが避暑に行つてゐた。元來叔父は餘り海邊を好まない性質なので、一家のものは毎年輕井澤の別荘へ行くのを例にしてゐたのだが、其年は是非海水浴がしたいと云ふ娘達の希望を容れて、材木座にある、或人の

邸宅を借り入れたのである。移る前に千代子が暇乞かたゞ報知に来て、まだ行つては見ないけれども、山陰の涼しい崖の上に、二段か三段に建てた割合手廣な住居ださうだから、是非遊びに来いと母に勧めてゐたのを、僕は傍で聞いてゐた。夫で僕は母に貴方こそ行つて遊んで來たら氣保養になつて可からうと忠告した。母は懐から千代子の手紙を出して見せた。夫には千代子と百代の連名で、母と僕と一所に來る様にと、彼等の女親の命令を傳へる如く書いてあつた。母が行くとすれば年寄一人を汽車に乗せるのは心配だから、是非共僕が付いて行かなければならなかつた。偏窟な僕からいふと、さう混雜した所へ二人で押し掛けるのは、世話にならないにしても氣の毒で厭だつた。けれども母は行きたい様な顔をした。さうして夫が僕の爲に行きたい様な顔に見えるので僕は益厭になつた。が、とゞの詰りとうゝ行く事にした。斯う云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、又意地の弱い男なのである。

母は内氣な性分なので平生から餘り旅行を好まなかつた。昔風に重きを置かなければ承知しない嚴格な父の生きてゐる頃は外へもさう度々は出られな様子であつた。現に僕は父と母が娛樂の目的をもつて一所に家を留守にした例を覚えてゐない。父が死んで自由が利くやうになつてからも、さう勝手な時に好きな所へ行く機會は不幸にして僕の母には與へられなかつた。一人で遠くへ行つたり、長く宅を空けたりする便宜を有たない彼女は、母子二人家庭に斯うして幾年を老いたのである。

鎌倉へ行かうと思ひ立つた日、僕は彼の女のために一個の鞆を携へて直行の汽車に乗つた。母は車の動き出す時、隣に腰を掛けた僕に、汽車も久し振りだねと笑ひながら云つた。さう云はれた僕にも實は餘り頻繁な經驗ではな

かつた。新しい氣分に誘はれた二人の會話は平生よりは生々しくしてゐた。何を話したか自分にも一向覺えのない事を、聞いたか聞かれたりして斷續に任せてゐるうちに車は目的地に着いた。豫め通知をしてないので停車場には誰も迎に來てゐなかつたが、車を雇ふとき某さんの別荘と注意したら、車夫はすぐ心得て引き出した。僕はしばらく見ないうちに、急に新しい家の多くなつた砂道を通りながら、松の間から遠くに見える畠中の黄色い花を美しく眺めた。それは一寸見ると丸で菜種の花と同じ趣を具へた目新しいものであつた。僕は車の上で、この散ら／＼する色は何だらうと考へ抜いた揚句、突然唐茄子だと氣が付いたので獨り可笑しがつた。

車が別荘の門に着いた時、戸障子を取外した座敷の中に動く人の影が往來から能く見えた。僕はそのうちに白い浴衣を着た男のゐるのを見て、多分叔父が昨日あたり東京から來て泊つてゐるのだらうと思つた。所が奥に居るものが悉く僕等を迎へるために玄關へ出て來たのに、其男は少しも顔を見せな

かつた。勿論叔父なら其位の事は有る可き筈だと思つて、座敷へ通つて見ると、其處にも彼の姿は見えなかつた。僕がきよ／＼してゐるうちに、叔母と母が汽車の中は嘸暑かつたらうとか、見晴らしの好い所が手に入つて結構だとか、年寄の女だけに口數の多い挨拶の遣取を始めた。千代子と百代子は母の爲に浴衣を勧めたり、脱ぎ捨てた着物を晒干して呉れたりした。僕は下女に風呂場へ案内して貰つて、水で顔と頭を洗つた。海岸からは大分道程のゐる山手だけれども水は存外悪かつた。手拭を絞つて金盥の底を見てゐると、忽ち砂の様な滓が濺んだ。

『是を御使ひなさい』といふ千代子の聲が突然後でした。振り返ると、乾いた白いタオルが肩の所に出でゐた。僕はタオルを受取つて立上つた。千代子は又傍にある鏡臺の抽出から櫛を出して呉れた。僕が鏡の前に坐つて髪を解かしてゐる間、彼女は風呂場の入口の柱に身體を持して、僕の濡れた頭を眺めてゐたが、僕が何も云はないので、向ふから『悪い水でせう』と聞いた。

僕は鏡の中を見たり、何うして斯んな色が着いてゐるのだらうと云つた。水の問答が済んだとき、僕は櫛を鏡臺の上に置いて、タオルを肩に掛けた儘立ち上つた。千代子は僕より先に柱を離れて座敷の方へ行かうとした。僕は藪から棒に後から彼女の名を呼んで、叔父は何處にゐるか尋ねた。彼女は立ち止まつて振り返つた。

『御父さんは四五日前一寸入らしたけど、一昨日又用が出来たつて東京へ御歸りになつた限よ』

『此處にや居ないのか』

『え。何故。ことによると今日の夕方吾一さんを連れて、又入らつしやるかも知れないけども』

千代子は明日もし天氣が好ければ皆と魚を漁りに行く筈になつてゐるのだから、田口が都合して今日の夕方迄に来て呉れなければ困るのだと話した。さうして僕にも是非一所に行けと勧めた。僕は魚の事よりも先刻見た浴衣掛

の男の居所が知りたかつた。

(十五)

『先刻誰だか男の人が一人座敷に居たぢやないか』

『あれ高木さんよ。ほら秋子さんの兄さんよ。知つてるでせう』

僕は知つて居るとも居ないと答へなかつた。然し腹の中では、此高木と呼ばれる人の何者かをすぐ了解した。百代子の學校朋輩に高木秋子といふ女のある事は前から承知してゐた。其人の顔も、百代子と一所に撮つた寫眞で知つてゐた。手蹟も繪端書で見た。一人の兄が亞米利加へ行つてゐるのだとか、今歸つて来た許だとかいふ話も其頃耳にした。困らない家庭なのだから、其人が鎌倉へ遊びに来てゐる位は怪しむに足らなかつた。よし此處に別荘を持つてゐた所で不思議はなかつた。が、僕は其高木といふ男の住んで

ゐる家を千代子から聞き度なつた。

「つい此下よ」と彼の女は云つた限であつた。

「別荘かい」と僕は重ねて聞いた。

「え、」

二人はそれ以外を語らずに座敷へ歸つた。座敷では母と叔母がまだ海の色が何うだとか、大佛が何方の見當に中るとかいふ左程でもない事を、問題らしく聞いたり教へたりしてゐた。百代子は千代子に彼等の父が其日の夕方迄に来ると云つて、わざ／＼知らせて來た事を告げた。二人は明日魚を漁りに行く時の樂みを、今眼の當りに描き出して、既に手の内に握つた人の如く語り合つた。

「高木さんも入らつしやるんでせう」

「市さんも入らつしやう」

僕は行かないと答へた。其理由として、少し宅に用があつて、今夜東京へ

歸らなければならぬからといふ説明を加へた。然し腹の中では只でさへ斯う混雑してゐる處へ、もし田口が吾一でも連れて來たら、夫れこそ自分の寐る場所さへ無くなるだらうと心配したのである。其上僕は姉妹の知つてゐる高木といふ男に會ふのが厭だつた。彼は先刻迄二人と僕の評判をしてゐたが、僕の來たのを見て、遠慮して裏から歸つたのだと百代子から聞いた時、僕はまづ窮屈な思ひを逃れて好かつたと喜んだ。僕は夫程知らない人を怖がる性分なのである。

僕の歸ると云ふのを聞いた二人は、驚いた様な顔をして留めに掛つた。殊に千代子は躍起になつた。彼女は僕を捉まへて變人だと云つた。母を一人殘してすぐ歸る法はないと云つた。歸ると云つても歸さないと云つた。彼女は自分の妹や弟に對してよりも、僕に對しては遙に自由な言葉を使ひ得る特權を有つてゐた。僕は平生から彼女が僕に對して振舞ふ如く大膽に率直に（或時は善意ではあるが）威壓的に、他人に向つて振舞ふ事が出來たなら、僕の

様な他に缺點の多いものでも、嘸愉快に世の中を渡つて行かれるだらうと想像して、大いに此小さな暴君を羨ましがつてゐた。

『えらい権幕だね』

『貴方は親不孝よ』

『ぢや叔母さんに聞いて来るから、もし叔母さんが泊つて行く方が可いつて、仰しやつたら、泊つて入らつしやい。ね』

百代子は仲裁を試みる様な口調で斯う云ひながら、すぐ年寄の話してゐる座敷の方へ立つて行つた。僕の母の意向は無論聞く迄もなかつた。従つて百代子の年寄二人から齎した返事も此處に述べるのは蛇足に過ぎない。要するに僕は千代子の捕虜になつたのである。

僕はやがて一寸町へ出て来るといふ口實の下に、午後の暑い日を洋傘で遮りながら別荘の附近を順序なく徘徊した。久しく見ない土地の昔を偲ぶ爲と云へば云へない事もないが、僕にそんな寂びた心持を嬉しがる風流があつた

にした所で、今は夫に耽ける落付も餘裕も興へられなかつた。僕は只うろろと其處等の標札を讀んで歩いた。さうして比較的立派な平屋建の門の柱に、高木の二字を認めた時、是だらうと思つて、しばらく門前に佇んだ。夫からは全く何の目的もなしに猶緩慢な歩行を約十五分許続けた。然し是は僕が自分の心に、高木の家を見る爲にわざ／＼表へ出たのではないと申し渡したと同じ様なものであつた。僕はさつさと引き返した。

(十六)

實を云ふと、僕は此高木といふ男に就いて、殆んど何も知らなかつた。只一遍百代子から彼が適当な配偶を求めつゝある由を聞いた丈である。其時百代子が、御姉さんには何うかしらと、丁度相談でもする様に僕の顔色を見たのを覺えてゐる。僕は何時もの通り冷淡な調子で、好いかも知れない、御父

さんと御母さんに話して御覽と云つたと記憶する。夫から以後僕の田口の家
 に足を入れた度敷は何遍あるか分らないが、高木の名前は少くとも僕のゐる
 席ではついで誰の口にも上らなかつたのである。夫程親しみの薄い、顔さへ
 見た事のない男の住居に何の興味があつて、僕はわざ／＼砂の焼ける暑さを
 冒して外出したのだらう。僕は今日迄其理由を誰にも話さずゐた。自分自
 身にも其時には能く説明が出来なかつた。たゞ遠くの方にある一種の不安が、
 僕の身體を動かして来たといふ漠たる感じが胸に射した許であつた。それが
 鎌倉で暮した二日の間に、紛れもないある形を取つて發展した結果を見て、
 僕を散歩に誘ひ出したのも矢張同じ力に違ないと今から思ふのである。
 僕が別荘へ歸つて一時間経つか経たないうちに、僕の注意した門札と同じ
 名前の男が忽ち僕の前に現れた。田口の叔母は、高木さんですと云つて叮嚀
 に其男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊つた血色の好い青年であつた。
 年から云ふと、或は僕より上かも知れないと思つたが、其きび／＼した顔付

を形容するには、是非共青年といふ文字が必要になつた位彼は生氣に充ちて
 居た。僕は此男を始めて見た時、是は自然が反對を比較する爲に、わざと二
 人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑つた。無論其不利益な
 方面を代表するのが僕なのだから斯う改まつて引合はされるのが、僕にはた
 だ悪い洒落としか受取られなかつた。

二人の容貌が既に意地の好くない對照を與へた。然し様子とか應對振とか
 になると僕は更に甚だしい相違を自覺しない譯に行かなかつた。僕の前にゐ
 るものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血屬ばかりであるのに、
 夫等に取り捲かれてゐる僕が、此高木に比べると、却て何處からか客にでも
 来たやうに見えた位、彼は自由に遠慮なく、しかも或程度の品格を落す危険
 なしに、己を取扱ふ術を心得てゐたのである。知らない人を怖れる僕に云は
 せると、此男は生れるや否や交際場裏に棄てられて、其儘今日迄同じ所で人
 と成つたのだと評したかつた。彼は十分と経たないうちに、凡ての會話を僕

の手から奪つた。さうして夫を悉く一身に集めて仕舞つた。其代り僕を除け物にしない爲の注意を拂つて、時々僕に一句か二句の言葉を與へた。夫が又生憎僕には興味の乗らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出来ず、高木一人を相手にする譯にも行かなかつた。彼は田口の叔母を親しげに御母さん御母さんと呼んだ。千代子に對しては、僕と同じ様に、千代ちやんといふ幼馴染に用ひる名を、自然に命ぜられたかの如く使つた。さうして僕に、先程御着きになつた時は、丁度千代ちやんと貴方の御噂をしてゐた所でしたと云つた。

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかつた。話をする所を聞いて、すぐ及ばないと思つた。夫丈でも此場合に僕を不愉快にするには充分だつたかも知れない。けれども段々彼を観察してゐるうちに、彼は自分の得意な點を、劣者の僕に見せ付ける様な態度で、誇り顔に發揮するのではなからうかといふ疑ひが起つた。其時僕は急に彼を憎み出した。さうして僕の口を利く

べき機會が廻つて来てもわざと沈黙を守つた。

落ち付いた今の氣分で其時の事を回顧してみると、斯う解釋したのは或は僕の僻みだつたかも知らない。僕はよく人を疑ぐる代りに、疑ぐる自分も同時に疑がはずには居れない性質だから、結局他に話をする時にも何方と判然した所が云ひ悪くなるが、若し夫が本當に僕の僻み根性だとすれば、其裏面には未疑結した形にならない嫉妬が潜んでゐたのである。

(十七)

僕は男として嫉妬の強い方か弱い方か自分にも能く解らない。競争者のない一人息子として寧ろ大事に育てられた僕は、少くとも家庭のうちで嫉妬を起す機會を有たなかつた。小學や中學は自分より成績の好い生徒が幸ひにしてさう無かつた爲か、至極太平に通り返けた様に思ふ。高等學校から大學へ

掛けては、席次に左程重きを置かないのが、一般の習慣であつた上、年毎に自分を高く見積る見識といふものが加はつて來るので、點數の多少は大した苦にならなかつた。此等を外にして、僕はまだ痛切な戀に落ちた經驗がない。一人の女を二人で争つた覺は猶更ない。自白すると僕は若い女殊に美しい若い女に對しては、普通以上に精密な注意を拂ひ得る男なのである。往來を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明かな日が射した時の様に晴やかな心持になる。會にはその所有者になつて見たいと云ふ考へも起る。然し其顔と其着物が何う果敢なく變化し得るかをすぐ豫想して、酔が去つて急にぞつとする人の淺間しさを覺える。僕をして執念く美しくしい人に附纏はらせないものは、正に此酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない。僕は此氣分に乗り移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主に變つたのではあるまいかと思つて、非常な不愉快に陥る。が、或は夫が爲に戀の嫉妬といふものを知らずに済ます事が出來たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいといふ希望を有つてゐるから、嫉妬心のないのを自慢にたくも何ともないけれども、今話した様な譯で、眼の當に此高木といふ男を見る迄は、さういふ名の付く感情に強く心を奪はれた試がなかつたのである。僕は其時高木から受けた名狀し難い不快を明かに覺えてゐる。さうして自分の所有でもない、又所有にする氣もない千代子が原因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑へ付けなければ自分の人格に對して申譯がない様な氣がした。僕は存在の權利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸ひ千代子と百代子が日が薄くなつたから海へ行くと云ひ出したので、高木が必ず彼等に跟いて行くに違ないと思つた僕は、早く跡に一人残りたいと願つた。彼等は果して高木を誘つた。所が意外にも彼は何とか言譯を拵へて容易に立たうとしなかつた。僕はそれを僕に對する遠慮だらうと推察して、益々眉を暗くした。彼等は次に僕を誘つた。僕は固より應じなかつた。高木の面前から一刻も早

く逃れる機會は、與へられないでも手を出して奪ひたい位に思つてゐたのだが、今の氣分では二人と濱邊まで行く努力が既に厭であつた。母は失望した様な顔をして、一所に行つて御出なと云つた。僕は黙つて遠くの海の上を眺めてゐた。姉妹は笑ひながら立ち上つた。

「相變らず偏窟ね貴方は。丸で腕白小僧見たいだわ」

千代子に斯う罵られた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。僕自身も腕白小僧らしい思ひをした。調子の好い高木は縁側へ出て、二人の爲に菅笠の様に大きな麥藁帽を取つて遣つて、行つて入らつしやいと挨拶をした。

二人の後姿が別荘の門を出た後で、高木は猶暫らく年寄を相手に話してゐた。斯うやつて避暑に来てゐると氣樂で好いが、何うして日を送るか、大問題になつて却て苦痛になる杯と、實際活氣に充ちた身體を暑さと退屈さに持ち扱つてゐる風に見えた。やがて、是から晩迄何をして暮さうかしらと獨言

の様に云つて、不意に思ひ出した如く、玉は何うですと僕に聞いた。幸ひにして僕は生れてからまだ玉突といふ遊戯を試みた事がなかつたのです。斷つた。高木は丁度好い相手が出来たと思つたのに残念だと云ひながら歸つて行つた。僕は活潑に動く彼の後影を見送つて、彼は是から姉妹のゐる濱邊の方へ行くに違ひないといふ氣がした。けれども僕は坐つてゐる席を動かさなかつた。

(十八)

高木の去つた後、母と叔母は少時彼の噂をした。初對面の人丈に母の印象は殊に深かつた様に見えた。氣の置けない、至つて行き届いた人らしいと云つて賞めてゐた。叔母は又母の批評を一々實例に照して確める風に見えた。此時僕は高木に就いて知り得た極めて乏しい知識の殆んど全部を訂正しなけ

ればならない事を發見した。僕が百代子から聞いたのでは、亞米利加歸りと
いふ話であつた彼は、叔母の語る所によると、さうではなくつて全く英吉利
で教育された男であつた。叔母は英國流の紳士といふ言葉を誰かから聞いた
と見えて、二三度それを使つて、何の心得もない母を驚かしたのみか、だか
ら何處となく品の善い所があるんですよと母に説明して聞かせたりした。母
は只へえと感心するのみであつた。

二人が斯んな話をしてゐる内、僕は殆んど一口も口を利かなかつた。唯上
部から見て平生の調子と何の變る所もない母が、此際高木と僕を比較して、
腹の中で何う思つてゐるだらうと考へると、僕は母に對して氣の毒でもあり
又恨めしくもあつた。同じ母が、千代子對僕と云ふ古い關係を一方に置いて、
更に千代子對高木といふ新しい關係を一方に想像するなら、果して何んな心
持になるだらうと思ふと、假令少しの不安でも、避け得られる所をわざと與
へるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕は唯でさへ不愉快な上

に、年寄に濟まないといふ苦痛をもう一つ重ねた。

前後の様から推す丈で、實際には事實となつて現れて來なかつたから何
とも云ひ兼ねるが、叔母は此場合を利用して、若し縁があつたら千代子を高木
に遣る積でゐる位の打明話を、僕等母子に向つて、相談とも宣告とも片付な
い形式の下に、する氣だつたかも知れない。凡てに氣が付く癖に、斯うなる
と却つて僕よりも迂遠い母は何うだか、僕は其場で叔母の口から、僕と千代子
と永久に手を別つべき談判の第一節を豫期してゐたのである。幸か不幸か、
叔母がまだ何も云ひ出さないうちに、姉妹は濱から廣い麥藁帽の縁をひらひ
らさして歸つて來た。僕が僕の占ひの的中しなかつたのを、母の爲に喜んだ
のは事實である。同時に同じ出來事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。
夕方になつて、僕は姉妹と共に東京から來る筈の叔父を停車場に迎へるべ
く母に命ぜられて家を出た。彼等は揃ひの浴衣を着て白い足袋を穿いてゐた。
それを後から見送つた彼等の母の眼に彼等が如何なる誇りとして映じたらう。

千代子と並で歩く僕の姿が又僕の母には畫として普通以上に何んなに價が高かつたらう。僕は母を欺く材料に自然から使はれる自分を心苦しく思つて、門を出る時振り返つて見たら、母も叔母もまだ此方を見てゐた。

途中迄来た頃、千代子は思ひ出した様に突然留まつて、「あゝ高木さんを誘ふのを忘れた」と云つた。百代子はすぐ僕の顔を見た。僕は足の運びを止めたが、口は開かなかつた。「最う好いぢやないの、此處迄来たんだから」と百代子が云つた。「だつて妻先刻誘つて呉れつて頼まれたのよ」と千代子が云つた。百代子は又僕の顔を見て逡巡つた。

「市さん貴方時計持つて居らして。今何時」
僕は時計を出して百代子に見せた。

「まだ間に合はない事はない。誘つて来るなら来ると好い。僕は先へ行つて待つてゐるから」

「最う遅いわよ貴方。高木さん、もし入らつしやる積なら屹度一人でも入ら

しつてよ。後から忘れましてたつて詫まつたら夫で好かないの」

妹姉は二三度押問答の末遂に後戻りをしない事にした。高木は百代子の豫言通りまだ汽車の着かないうちに急ぎ足で構内へ這入つて来て、妹姉に、何うも非道い、あれ程頼んで置くのにと云つた。夫から御母さんとは聞いた。最後に僕の方を向いて、先程はと愛想の好い挨拶をした。

(十九)

其晩は叔父と従弟を待ち合した上に、僕等母子が新たに食卓に加はつたので、食事の時間が何時もより大分後れた許でなく、私かに恐れた通り甚だしい混雑の中に箸と茶碗の動く光景を見せられた。叔父は笑ひながら、市さん丸で火事場の様だらう、然し會には斯んな騒ぎをして飯を食ふのも面白いものだよと云つて、間接の言譯をした。閑静な膳に慣れた母は、此賑やかさの

中に實際叔父の言葉通り愉快らしい顔をしてゐた。母は内氣な癖に斯ういふ陽氣な席が好きなのである。彼女は其時偶然口にした一鹽にした小鱈の焼いたのを美味いと云つて頻りに賞めた。

『漁師に頼んどくと幾何でも拵へて来て呉れますよ。何なら歸りに持つて入らつしやいな。姉さんが好だから上げたいと思つてたんですが、つい序が無かつたもんだから。夫にすぐ腐くなるんでね』

『妾も何時か大磯で眺へてわざ／＼東京迄持つて歸つた事があるが、餘つ程氣を付けないと途中でね』

『腐るの』と千代子が聞いた。

『叔母さん興津鯛お嫌ひ。妾はよか興津鯛の方が美味しいわ』と百代子が云つた。

『興津鯛は又興津鯛で結構ですよ』と母は大人しい答をした。斯んなくだ／＼しい會話を、僕が何故覺えてゐるか云ふと、僕は其時母

の顔に表はれた、さも満足らしい氣持を能く注意して見てゐたからであるが、最う一つは僕が母と同じ様に一鹽の小鱈を好いてゐたからでもある。

序だから此處で云ふ。僕は自分の嗜好や性質の上に於て、母に大變能く似た所と、全く違つた所と兩方有つてゐる。是はまだ誰にも話さない秘密だが、實は單に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分と何處が何う違つて、何處が何う似てゐるかの詳しい研究を人知れず重ねたのである。何故そんな真似をしたかと母に聞かれては云ひ兼ねる。たとひ僕が自分に聞き糺して見ても判切云へなかつたのだから、理由は話せない。然し結果からいふと斯うである。――缺點でも母と共に具へてゐるなら僕は太變嬉しかつた。長所でも母になくつて僕丈有つてゐると甚だ不愉快になつた。其内で僕の最も氣になるのは、僕の顔が父に丈似て、母とは丸で縁のない目鼻立に出来上つてゐる事であつた。僕は今でも鏡を見るたびに、器量が落ちても構はないから、もつと母の人相を多量に受け繼いで置いたら、母の子らしくつて嘸心持

が好いだらうと思ふ。

食事の後れた如く、寝る時間も順繰りに延びて大分遅くなつた。其上急に人数が増えたので、床の位置やら部屋割を極める丈が叔母に取つての一骨折であつた。男三人は一所に固められて、同じ蚊帳に寝た。叔父は肥つた身體を持ち扱つて、團扇をしきりにばた／＼云はした。

「市さん何うだい、暑いぢやないか。是ぢや東京の方が餘つ程楽だね」

僕も僕の隣にゐる吾一も東京の方が楽だと云つた。夫では何を苦んでわざわざ鎌倉下り迄出掛けて来て、狭い蚊帳へ押し合ふ様に寝るんだか、叔父にも吾一にも僕にも説明のしやうがなかつた。

「是も一興だ」

疑問は叔父の此一句で忽ち納りが付いたが、暑さの方は中々去らないので誰もすぐは寝つかれなかつた。吾一は若い丈に、明日の魚捕の事を叔父に向つてしきりに質問した。叔父は又眞面目だか冗談だか、船に乗りさへすれば

魚の方で風を望んで降る様な旨い話をして聞かせた。夫がたゞ自分の件を相手にする許でなく、時々はねえ市さんと、そんな事に丸で冷淡の僕迄聴手にするのだから少し變であつた。然し僕の方はそれに對して相當な挨拶をする必要があるのので、話の濟む前には、僕は當然同行者の一人として受答をする様になつてゐた。僕は固より行く積でも何でもなかつたのだから、此變化は僕に取つて少し意外の感があつた。氣樂さうに見える叔父は其内大きな鼾聲をかき始めた。吾一もすや／＼寐入つた。たゞ僕丈は開いてゐる眼をわざと閉ぢて、更ける迄色々な事を考へた。

(二十)

翌日眼が覺めると、隣に寐てゐた吾一の姿が何時の間にかもう見えなくなつてゐた。僕は寐足らない頭を枕の上に着けて、夢とも思索とも名の付かな

い路を辿りながら、時々別種の人間を偷み見る様な好奇心を以て、叔父の寝顔を眺めた。さうして僕も寝てゐる時は、傍から見ると、矢張り春の無い顔をしてゐるのだらうかと考へて見た。其處へ吾一が這入つて来て、市さん何うだらう天氣はと相談した。一寸起きて見ろと促すので、起き上つて縁側へ出ると、海の方には一面に柔かい霧の幕が掛つて、近い岬の木立さへ常の色には見えなかつた。降つてるのかねと僕は聞いた。吾一はすぐ庭先へ飛び下りて、空を眺め出したが、少し降つてると答へた。

彼は今日の船遊びの中止を深く氣遣ふものゝ如く、二人の姉迄縁側へ引張出して、頻りに何うだらうとを繰り返した。仕舞に最後の審判者たる彼の父の意見を必要と認めたものか、まだ寝てゐる叔父をとらうと呼び起した。叔父は天氣杯は何うでも好いと云つた様な眠たい眼をして、空と海を一應見渡した上、何此模様なら今に屹度晴れるよと云つた。吾一はそれで安心したらしかつたが、千代子は當にならぬ無責任な天氣豫報だから心配だと云つ

て僕の顔を見た。僕は何とも云へなかつた。叔父は、なに大丈夫々々と受合つて風呂場の方へ行つた。

食事を済ます頃から霧の様な雨が降り出した。それでも風がないので、海の上は平生よりも却て穏かに見えた。生憎な天氣なので人の好い母はみんなに氣の毒がたつた。叔母は今に屹度本降になるから今日は止したが好からうと注意した。けれども若いものは悉く行く方を主張した。叔父はぢや御婆さん丈残して、若いものが揃つて出掛ける事にしようと言つた。すると叔母が、では御爺さんは何方になさるとわざと叔父に聞いて、みんなを笑はした。

『今日は是でも若いものゝ部だよ』

叔父は此言葉を證據立てる爲だか、何だか。早速立つて裕衣の尻を端折つて下へ降りた。姉弟三人も其儘の姿で縁から降りた。

『御前達も尻を捲るが好い』
『厭な事』

僕は山賊の様な毛脛を露出しにした叔父と、静御前の笠に似た恰好の麥藁帽を被つた女二人と、黒い兵児帯をこま結びにした弟を、縁の上から見下して、全く都離れのした不思議な團體の如く眺めた。

「市さんが又何か悪口を云はうと思つて見てゐる」と百代子が薄笑ひをしながら僕の顔を見た。

「早く降りて入らつしやい」と千代子が叱る様に云つた。

「市さんに悪い下駄を貸して上げるが好い」と叔父が注意した。

僕は一も二もなく降りたが、約束のある高木が来ないので、夫が又一つの問題になつた。大方此天氣だから見合してゐるのだらうと云ふのが、みんなの意見なので、僕等がそろゝ歩いて行く間に、吾一が驅足で迎に行つて連れて来る事にした。

叔父は例の調子でしきりに僕に話し掛けた。僕も相手になつて歩調を合せた。其うちに、男の足だものだから、何時の間にか姉妹を乗り越した。僕は

一度振り返つて見たが、二人は後れた事に一向頓着しない様子で、毫も追ひ付かうとする努力を示さなかつた。僕には夫がわざと後から来る高木を待ち合せる爲の様にしか取れなかつた。それは誘つた人に對する禮儀として、彼等の取るべき當然の所作だつたのだらう。然し其時の僕にはさう思へなかつた。さう思ふ餘地があつても、さうは感ぜられなかつた。早く来いといふ合圖をしようといふ考へで振り向いた僕は、合圖を止めて又叔父と歩き出した。さうして其儘小坪へ這入る入口の岬の所迄来た。其處は海へ出張つた山の裾を、人の通れる丈の狭い幅に削つて、ぐるりと向ふ側へ廻り込まれる様にした坂道であつた。叔父は一番高い坂の角迄来て留まつた。

(二十一)

彼は突然彼の體格に相應した大きな聲を出して姉妹を呼んだ。自白するが、

僕は夫迄に何度も後を振り返つて見ようとしたのである。けれども氣が咎めると云ふのか、自尊心が許さないと云ふのか、振り向かうとする毎に、首が猪の様に堅くなつて後へ回らなかつたのである。

見ると二人の姿はまだ一町程下にあつた。さうして其すぐ後に高木と吾一が續いてゐた。叔父が遠慮のない大きな聲を出して、おゝいと呼んだ時、姉妹は同時に僕等を見上げたが、千代子はすぐ後にゐる高木の方を向いた。すると高木は被つてゐた麥藁帽を右の手に取つて、僕等を目當に頻りに振つて見せた。けれども四人のうちで聲を出して叔父に應じたのは只吾一丈であつた。彼は又學校で號令の稽古でもしたものと見えて、海と崖に反響する様な答と共に兩手を一度に頭の上に差し上げた。

叔父と僕は崖の鼻に立つて彼等の近寄るのを待つた。彼等は叔父に呼ばれた後も呼ばれない前と同じ遅い歩調で、何か話しながら上つて来た。僕には夫が尋常でなくつて、大いに巫山戯てゐる様に見えた。高木は茶色のだぶだ

ぶした外套の様なものを着て時々隠袋へ手を入れた。此暑いのになさか外套は着られまいと思つて、最初は不思議に眺めてゐたが、段々近くなるに従つて、それが薄い雨除である事に氣が付いた。其時叔父が突然、市さんヨットに乗つて其處いらを遊んで歩くのも面白いだらうねと云つたので、僕は急に氣が付いた様に高木から眼を轉じて脚の下を見た。すると磯に近い所に、眞白に塗つた空船が一艘、静かな波の上に浮いてゐた。練雨と迄も行かない細かいものが猶降り已まないで、海は一面に暈されて、平生なら手に取る様に見える向ふ側の絶壁の樹も岩も、殆ど一色に眺められた。其内四人は漸く僕等の傍迄来た。

「何うも御待たせ申しまして、實は髭を剃つてゐたものだから、途中で已める譯に行かず……」と高木は叔父の顔を見るや否や言譯をした。

「えらい物を着込んで暑かありませんか」と叔父が聞いた。

「暑くつたつて脱ぐ譯に行かないのよ。上はハイカラでも下は蠻殻なんだか

ら』と千代子が笑つた。高木は雨外套の下に、直に半袖の薄い襦袢を着て、變な半洋袴から餘つた脛を丸出しにして、黒足袋に組下駄を引掛けてゐた。彼は此通りと雨外套の下を僕等に示した上、日本へ歸ると服装が自由で貴女の前でも氣兼ねなくつて好いと云つてゐた。

一同がぞろ／＼揃つて道幅の六尺ばかりな汚苦しい漁村に這入ると、一種不快な臭がみんなの鼻を撲つた。高木は隠袋から白い手巾を出して短い髭の上を掩つた。叔父は突然其處に立つて僕等を見てゐた子供に、西の者で南の方から養子に來たものゝ宅は何處だと奇體な質問を掛けた。子供は知らないと云つた。僕は千代子に何でそんな妙な聞き方をするのかと尋ねた。昨夕聞き合せに人を遣つた家の主人が云ふには、名前は忘れたから是々の男と云つて探して歩けば分ると教へたからだ。と千代子が話して聞かした時、僕は此呑氣な教へ方と、同じく呑氣な聞き方を、如何にも餘裕なくこせついでゐる自分と比べて見て、妙に羨ましく思つた。

「それで分るんでせうか」と高木が不思議な顔をした。

「分つたら餘つ程奇體だわね」と千代子が笑つた。

「何大丈夫分るよ」と叔父が受合つた。

吾一は面白半分人の顔さへ見れば、西のもので南の方から養子に來たもの宅は何處だと聞いては、其度にみんなを笑はした。一番仕舞に、編笠を被つて白の手甲と脚絆を着けた月琴彈の若い女の休んでゐる汚ない茶店の婆さんに同じ問を掛けたら、婆さんは案外にもすぐ其處だと容易く教へて呉れたので、みんなが又手を拍つて笑つた。それは往來から山手の方へ三級ばかりに仕切られた石段を登り切つた小高い所にある小さい藁葺の家であつた。

(三十二)

此細い石段を思ひ／＼の服装をした六人が前後してぞろ／＼登る姿は、傍

で見てもたら定めし變なものでたらうと思ふ。其上六人のうちで、是から何をするか明瞭した考へを有つてゐたものは誰もないのだから甚だ氣樂である。肝心の叔父さへ唯船に乗る事を知つてゐる丈で、後は網だか釣りだか、又何處迄漕いで出るのか一向辨別へないらしかつた。百代子の後から足の力で擦り減されて凹みの多くなつた石段を踏んで行く僕は斯んな無意味な行動に、己を委ねて悔いしない所を、避暑の趣とでも云ふのかと思ひつゝ上つた。同時に此無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕がある男とある女の間、暗に演ぜられつゝあるのでは無からうかと疑つた。さうして其一幕の中で、自分の務めなければならぬ役割が若し有るとすれば、穩かな顔をした運命に、軽く翻弄される役割より外にあるまいと考へた。最後に何事も打算しないで唯無雑作に遣つて除ける叔父が、人に氣の付かないうちに、此幕を完成するとしたら、彼こそ比類のない巧妙な手際を有つた作者と云はなければなるまいといふ氣を起した。僕の頭に斯ういふ影が射した時、すぐに後

から跟いて上つて來る高木が、是ぢや暑くつて堪まらない、御免蒙つて雨防衣を脱がうと云ひ出した。

家は下から見ただよりも猶小さくて汚なかつた。戸口に杓子が一つ打ち付けてあつて、夫に百日風邪吉野平吉一家一同と書いてあるので、主人の名が漸く分つた。夫を見付出して、みんなに聞えるやうに讀んだのは、目敏い吾一の手柄であつた。中を覗くと天井も壁も悉く黒く光つてゐた。人間としては婆さんが一人居たぎりである。其婆さんが、今日は天氣が好くないので、大方御出ぢやあるまいと云つて早く海へ出ましたから、今濱へ下りて呼んできませうと斷りを述べた。船へ乗つて出たのかねと叔父が聞くと、婆さんは多分あの船だらうと答へて、手で海の上を指した。霧はまだ晴れなかつたけれども、先刻よりは空が大分明るくなつたので、沖の方は比較的判切見える中に、指された船は遠くの向ふに小さく横はつてゐた。

『あれぢや大變だ』

高木は携へて来た雙眼鏡を覗きながら斯う云つた。
 「随分呑氣ね、迎ひに行くつて、何うしてあんな所へ迎ひに行けるんでせう」と千代子は笑ひながら、高木の手から雙眼鏡を受取つた。
 婆さんは何直ですと答へて、草履を穿いた儘、石段を駆け下りて行つた。
 叔父は田舎者は氣樂だなど笑つてゐた。吾一は婆さんの後を追掛けた。百代子はぼんやりして汚ない縁へ腰を卸した。僕は庭を見廻した。庭といふ名の勿體なく聞こえる縁先は五坪にも足りなかつた。隅に無花果が一本あつて、腥ぐさい空氣の中に、青い葉を少し許り茂らしてゐた。枝にはまだ熟しない實が云譯程結つて、其一本の股の所に、空の蟲籠が懸つてゐた。其下には瘠せた鶏が二三羽無暗に爪を立てた地面の中を餓ゑた嘴で啄いてゐた。僕は其傍に伏せてゐる鐵網の鳥籠らしいものを眺めて、その恰好が丁度佛手柑の如く不規則に歪んでゐるのに一種滑稽な思ひをした。すると叔父が突然、何分臭いねと云ひ出した。百代子は、あたし最う御魚なんか何うでも好いから、

早く歸りたくなつたわと心細さうな聲を出した。此時迄雙眼鏡で海の方を見ながら、断えず千代子と話してゐた高木はすぐ後を振り返つた。

「何をしてゐるだらう。一寸行つて様子を見て來ませう」

彼はさう云ひながら、手に持った雨衣と雙眼鏡を置いたために後の縁を顧みた。傍に立つた千代子は高木の動かない前に手を出した。

「此方へ御出しなさい。持つてるから」

さうして高木から二つの品を受け取つた時、彼女は改めて又彼の半袖姿を見て笑ひながら「とうとう、蠻殻になつたのね」と評した。高木は唯苦笑した。丈で、すぐ濱の方へ下りて行つた。僕は左も運動家らしく發達した彼の肩の肉が、急いで石段を下りる爲に手を振る毎に動く様を後から無言のまゝ、注意して眺めた。

(二十三)

船に乗るためにみんなが揃つて濱に下り立つたのは夫から約一時間の後であつた。濱には何の祭の前か過か、深く砂の中に埋られた高い幟の棒が二本僕の眼を惹いた。吾一は何處からか磯へ打ち上げた枯枝を拾つて来て、廣い砂の上に大きな字と大きな顔をいくつも並べた。

「さあ御乗り」と坊主頭の船頭が云つたので、六人は順序なくごたごたに船縁から這ひ上つた。偶然の結果千代子と僕は後のものに押されて、仕切りの付いた舳の方に二人膝を突合せて坐つた。叔父は一番先に、胴の間といふのか、真中の廣い所に、家長らしく胡坐をかいて仕舞つた。さうして高木を其日の客として取り扱ふ積か、さあ何うぞと案内したので、彼は否應なしに叔父の傍に座を占めた。百代子と吾一は彼等の次の間と云つた様な仕切の中に

船頭と一所に這入つた。

「何うです此方が空いてますから入つしやいませんか」と高木はすぐ後の百代子を顧みた。百代子は難有うといつたきり席を移さなかつた。僕は始めから千代子と一つ薄縁の上に坐るのを快よく思はなかつた。僕の高木に對して嫉妬を起した事は既に明かに自白して置いた。其嫉妬は程度に於て昨日も今日も同じだつたかも知れないが、それと共に競争心は未だ嘗て微塵も僕の胸に萌さなかつたのである。僕も男だから是から先いつ何んな女を的に劇烈な戀に陥らないとも限らない。然し僕は斷言する。若し其戀と同じ度合の劇烈な競争を敢てしなければ思ふ人が手に入らないなら、僕は何んな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懐ろにして戀人を見棄て、仕舞ふ積である。男らしくないとも、勇氣に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他から評したら何うにも評されるだらう。けれども夫程切ない競争をしなければ吾有に出来にくい程、何方へ動いても好い女なら、夫程切ない競争に價しない女だとしか僕に

けいせいステキタリ

彼岸通迄

三八〇

は認められないのである。僕には自分に靡かない女を無理に抱く喜びよりは、相手の戀を自由の野に放つて遣つた時の男らしい氣分で、わが失戀の瘡痕を淋しく見詰めてゐる方が、何の位良心に對して満足が多いか分らないのである。

僕は千代子に斯う云つた。――

「千代ちやん行つちや何うだ。彼方の方が廣くつて樂な様だから」

「何故、此處に居ちや邪魔なの」

千代子はさう云つた儘動かうともしなかつた。僕には高木がゐるから彼方へ行けといふのだといふ様な説明は、露骨と聞こえるにしろ厭味と受取られるにしろ、全く口にする勇氣は出なかつた。たゞ彼女から斯う云はれた僕の胸に、一種の嬉しさが閃めいたのは、口と腹と何う裏表になつてゐるかを曝露する好い證據で、自分で自分の薄弱な性情を自覺しない僕には痛い打撃であつた。

昨日會つた時よりは氣の所爲か少し控目になつたやうに見える高木は、千代子と僕の間に起つた此問答を聞きながら知らぬ振をしてゐた。船が碇を離れたとき、彼は「好い案排に空模様が直つて來ました。是ぢや日がかん／＼照るより却て結構です。船遊びには持つて來いといふ御天氣で」といふ様な事を叔父と話し合つたりした。叔父は突然大きな聲を出して、「船頭、一體何を捕るんだ」と聞いた。叔父も其他のものも、此時迄何を捕るんだか一向知らずにゐたのである。坊主頭の船頭は、粗末な言葉で、蛸を捕るんだと答へた。此奇抜な返事には千代子も百代子も驚くよりも可笑しかつたと見えて、忽ち聲を出して笑つた。

「蛸は何處にゐるんだ」と叔父が又聞いた。

「此處いらにゐるんだ」と船頭は又答へた。

さうして湯屋の留桶を少し深くした様な小判形の桶の底に、硝子を張つたものを水に伏せて、其中に顔を突込む様に押込みながら、海の底を覗き出し

彼岸通迄

三八一

た。船頭は此妙な道具を鏡と稱へて、二つ三つ餘分に持合せたのを、すぐ僕等に貸して呉た。第一にそれを利用したのは船頭の傍に座を取つた吾一と百代子であつた。

(二十四)

鏡が夫から夫へと順々に回つた時、叔父は是や鮮やかだね、何でも見えると非道く感心してゐた。叔父は人間社會の事に大抵通じてゐる所爲か、萬に高を括る癖に、斯ういふ自然界の現象に襲はれるとどき驚く性質なのである。自分は千代子から渡された鏡を受け取つて、最後に一枚の硝子越しに海の底を眺めたが、かねて想像したと少しも異なる所のない極めて平凡な海の底が眼に入つた丈である。其處には小さい岩が多少の凸凹を描いて一面に連なる間に、蒼黒い藻草が限りなく蔓延つてゐた。其藻草が恰も生温るい風に翻られ

る様に、波のうねりで靜かに又永久に細長い莖を前後に揺かした。

『市さん 蝸が見えて』

『見えな』

僕は顔を上げた。千代子は又首を突込んだ。彼女の被つてゐたへな〜の麥葉帽子の縁が水に浸つて、船頭に操つられる船の勢に逆らふ度に、可憐な波をちよろ〜起した。僕は其後に見える彼女の黒い髪と白い頸筋を、其顔よりも美しく眺めてゐた。

『千代ちやんには、目付かつたから』

『駄目よ。蝸なんか何處にも泳いでゐやしないわ』

『餘つ程慣れないと中々目付ける譯に行かないんださうです』

是は高木が千代子の爲に説明して呉れた言葉であつた。彼女は兩手で桶を抑へたまゝ、船縁から乗り出した身體を高木の方へ捻ぢ曲げて、『道理で見えないのね』といつたが、其儘水に戯れる様に、兩手で抑へた桶をふく〜動

かしてゐた。百代子が向の方から御姉さんと呼んだ。吾一は居所も分らない
蛸を無暗に突き廻した。突くには二間許の細長い女竹の先に一種の穂先を着
けた變なものを着るひるのである。船頭は桶を齒で銜へて、片手に棹を使ひな
がら、船の動いて行くうちに、蛸の居所を探し中てるや否や、その長い竹で
巧みにぐにやぐにした怪物を突き刺した。

蛸は船頭一人の手で、何疋も船の中に入つたが、何れも同じ位な大きさ
で、是はと驚く程のものはなかつた。始めのうちこそ皆な珍らしがつて、捕
れるたびに騒いで見たが、仕舞には流石元氣な叔父も少し飽きて來たと見え
て、『斯う蛸ばかり捕つても仕方がないね』と云ひ出した。高木は煙草を吹か
しながら、船底にかたまつた獲物を眺め始めた。

『千代ちゃん、蛸の泳いでる所を見た事がありますか。一寸來て御覽なさい、
餘程妙ですよ』
高木は斯う云つて千代子を招いたが、傍に坐つてゐる僕の顔を見た時、『須

永さん何うです、蛸が泳いでるますよ』と付け加へた。僕は『左うですか。
面白いでせう』と答へたなり直席を立たうともしなかつた。千代子はどれと
云ひながら高木の傍へ行つて新しい座を占めた。僕は故の所から彼女にまだ
泳いでるかと思つた。

『え、面白いわ、早く來て御覽なさい』

蛸は八本の足を真直に揃へて、細長い身體を一氣にすつくと區切りつゝ、
水の中を一直線に船板に突き當る迄進んで行くのであつた。中には鳥賊の様
に黒い墨を吐くのも交つてゐた。僕は中腰になつて一寸其光景を覗いたなり
故の席に戻つたが、千代子は夫限高木の傍を離れなかつた。

叔父は船頭に向つて蛸はもう澤山だと云つた。船頭は歸るのかと聞いた。
向ふの方に大きな竹籃の様なもの二つ三つ浮いてゐたので、蛸ばかりで淋
しいと思つた叔父は、船を其一つの側へ漕ぎ寄せさせた。申し合せた様に、
船中立ち上つて籃の内を覗くと、七八寸もあらうと云ふ魚が、縦横に狭い水